

〔4〕 実 践 例

A 運動場面でのからだづくり

1 保健体育科

< Aグループ >

※生徒の実態

- ・ 男子3名、女子5名、計8名（内、ダウン症3名、自閉的傾向2名、てんかん2名、小頭症1名）で、比較的障害の重い方のグループで、個人の能力差が極めて大きい。
- ・ ルールや指示による認識が薄く、集団としての関わりが難しい。
- ・ 全力走をしたり、めあてを意識して運動に取り組める生徒は数名である。
- ・ 運動能力・体力テスト等の測定結果は、P140参照。

(1) ねらい

- ・ 運動経験を少しでもふやし、身体を動かすことの喜びや、その運動の楽しさを味わう。
- ・ 身体を動かし、運動を通して、集団としての意識や適応力を養い、少しでもすすんでやろうという意欲や態度を育てるとともに、健康の増進や体力の向上を図る。

(2) 年間指導計画

月	4	5	6	7
単元名	◎ 集合整列 →		◎ 水泳 →	
・主な内容	・ 並び方、数え方、班編成		・ 水慣れ、シャワー、水中歩行、けのび	
	◎ 基本の運動—いろいろな歩・走・回る・とぶ →		・ 水遊び（水中石ひろい等）・ビート板・バタ足	
月	9	10	11	12
単元名	→◎ なわとび運動 →			
・主な内容	・ 長なわ大波小波、8の字とび、連続とび、通りぬけ、用具を使って、集団とび			
	・ 短なわ前回しとび ◎ 基本の運動 — なげる・とる・押す・引く・ぶらさがる —			
月	1	2	3	
単元名	◎ 手具を使った運動 →			
・主な内容	・ 棒 ・ なわ ・ ボール ・ 輪 など			
	→ ・ リズム走 ・ いろいろな歩・走・バランス ・ 回る、とぶ・ダッシュ、スキップ等 →			

(3) 主な方針と手だて

- ・ 各種運動の持つ楽しさを味わわせ、指導段階を細分化し、生徒の発達段階や障害等の実態に応じた指導を心がける。
※ 1
- ・ 個々の実態を詳しく分析し、一人ひとりに応じためあてを持たせ、がんばったという喜びを体得させる。
- ・ 集団の中で運動する時のルールやきまりを体得させ、少しでも社会性を養うと共に、仲間意識を育て、みんなで運動することの楽しさを味わわせる。

※ 1 短なわとびにおける指導の細分化表（試案）

跳ぶ	<ol style="list-style-type: none"> 1. 歩く 2. 足型に合わせて歩く 3. 足型に合わせて歩く、とぶ(ケンパ) 4. その場両足とび→連続 5. 置いてある短なわをとぶ 6. 低いゴムをとぶ 7. エスポーをとぶ 8. エスポーにはったゴムをとぶ 	なわをまわす	<ol style="list-style-type: none"> 1. 腕をふる 2. 腕をまわす(肩まわし) 3. 短なわをもってふる 4. 短なわをまわす(片手) 肩まわし→腕まわし→手首まわし 5. 両手に短なわをもってまわす 肩まわし→腕まわし→手首まわし 6. 同じ調子で両足とびをしながらまわす
まわしながらとぶ	<p>〔短なわとび〕</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 短なわを前にまわす。 2. 短なわを前にまわしてまたいで歩く。 3. 短なわを前にまわして片足でとぶ。(並足とび) 4. 両足とびで1回ずつとぶ。 5. 両足とびで連続とび(1回旋2跳躍) 6. 両足とびで連続とび(1回旋1跳躍) 7. 回数めあてとび 8. 時間とび 9. 種目とび 		

(4) 実践例(昭和63年度のとりくみから)

主な内容とねらい	指導上の配慮・手だて	活動の様子
<p>※ 長なわとび</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大波小波での1回とび <p>◎ なわに入るタイミングをつかみ、できるだけ一人で1回とびができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・8の字とびと連続とび(大波小波→回旋とび) <p>◎ 8の字とびの要領を覚えてできるだけ自分でタイミングをとって、少しでも連続とびができる。</p> <p>※ 短なわとび</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前方順とび ・とぶ・なわをまわす ・並足1回ずつとび ・両足1回ずつとび ・連続とび ・回数とび ・時間とび ・種目とび <p>◎ めあてに向かってできるだけ自分で練習しようとする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・なわに入るタイミングがつかめない生徒には、肩で合図したり、声かけや補助をした。又、なわの速さを生徒の実態に合わせてゆっくりにしたり、音楽を有効に使った。 ・8の字とびのスタート位置と並ぶ位置、連続とびのとぶ場所をマークした。なわに入るタイミングは実態に応じて、声かけ、肩おし、教師と一緒に等、徐々に自分で入れるよう導いた。また回数もめあてを増した。 ・生徒の実態に応じて、指導の細分化表に基づき、「とぶ」こと、「なわを回す」ことの段階を追った練習の場を意図的に設定した。そしてそのスモールステップを1つずつクリアしていき、まわしながらとぶことができるように導いた。 <p>能力別グループに分け、一人ひとりのめあてに応じた練習法で練習させた。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・最初はほとんど一人ではタイミングをとってなわに入れなかったが、「スウーッピョン」「セーノーピョン」といったタイミングのよい声かけや音楽、肩おし等で徐々になわに入れるようになった。 ・最初はなわをとんだ後、自分の行く場所がわからず、スムーズに回らなかったが、移動の道すじや並ぶ所に印をした後は、徐々に要領を得て、8の字とびができるようになっていった。さらにはすこしずつ、自分のめあてをクリアし、回数をふやしても、切れずに連続して8の字とびができた。 ・個人差がとても大きく、指示がうまく理解できず、なわを回せない生徒、正しくなわが持てない生徒、回す・とぶの協応動作がうまくいかない生徒、両足とびができず、どうしても並足とびになってしまう生徒等々であった。グループ別に分け個の実態に応じた練習をくりかえし、めあてをスモールステップ化することで、少しずつではあるが、肩回しから、うで回しへ発展できた生徒や、協応動作で「クルッ、トン、ピョン」のタイミングのよい声かけや、指示、音楽等ではじめてとべた生徒、さらには回数をふやし、次種目にも挑戦しようとする生徒等が出てきた。

<Bグループ>

※生徒の実態

- ・男子9名、女子9名（内、てんかん2名、自閉的傾向1名等）計18名で編成され、比較的障害の程度が軽く、運動能力が高い方のグループであるが、個人の能力差がかなり大きい。
- ・ある程度の指示は理解できるが、それに比べて運動経験は不足しており、技能が低い。
- ・運動能力テスト、体力診断テスト等の実態はP140 参照。

(1) ねらい

- ・運動の持つ楽しさを味わわせ、少しでもすすんで生き生きと運動することができる。
- ・運動経験を積み重ね、運動技能の向上と運動機能の促進を図る。
- ・めあてをもって最後までがんばろうというねばり強さや集中力を養い、かつ仲間と協力することによって社会性を培う。

(2) 年間指導計画

月	4	5	6	7
単 元 お よ び 主 な 内 容	◎ 陸上運動 → ◎ 水泳 〈目標〉 ・50m走 ・タッチリレー ・リレー ・水慣れ、シャワー ・ビート板バタ足 ・100m走 ・フラウチングスタート ・スウェーデンリレー ・水遊び（水中石ひろい、 ・面かぶりクロール ・20m走 ・10秒間走 ・追い抜き走（インターバル走） 水中ジャンケン、また ・呼吸法 ・30m走 ・100m走 ・集団走 くぐり、ブクブクパッ ） ・長い距離 ・種目			
月	9	10	11	12
単 元 お よ び 主 な 内 容	→ ◎ バスケットボール →	◎ サッカー →	◎ バスケットボール →	
	・ためしのゲーム ・ボール慣れ ・30秒シュート ・3対3のゲーム	・ためしのゲーム ・ボール慣れ ・2人パス、3角パス ・6対6のゲーム	・ためしのゲーム ・30秒シュート ・ルール決め ・バスリレーゲーム	・パス&シュート ・3対3バスゲーム ・3メンダッシュ ・5対5ゲーム
月	1	2	3	
単 元 お よ び 主 な 内 容	◎ 体操 →		◎ 卓球 →	
	・リズムに合わせた体操 ・エアロビック体操 ・用具を使った体操 ・棒を使って	・ボールを使って ・なわを使って ・なわとび運動	・ラケット打ち ・ワンバウンド打ち ・乱打 ・ラリー	・ネットプレー ・ドライブ ・カット ・ゲーム

(3) 方針と手だて

- ・各種運動の持つ楽しさを味わわせ、生徒の発達段階や障害等の実態に応じた指導を心がける。
- ・実態把握（体格体位、諸能力測定、検査等）を行ない、より正しくかつ詳しい生徒の実態をつかみ、個々の指導に生かす。
- ・集団的スポーツでは、特にルールやきまりを体得させることで、社会的適応力の育成や仲間と協力する大切さ等の社会性を養い、みんなで運動することの楽しさを味わわせる。
- ・個々の実態や記録、競争意識を高めるための具体的なめあてを設定し、目標を持つことで意欲や集中力を高め、そして記録が向上したり、めあてが達成されたりすることで自信とさせたい。
- ・特にBグループでは、集団のルールやきまりを守りながら、その中で自分の力を最大限に発揮したり、仲間意識を高めたりして、一人ひとりがチームの中で活躍できるような場を設定したい。

※水泳における実践例 ～水泳HIGHグループ～

	初めての記録と様子(7/6)	主な手だてと配慮(記録の変容) 7/7(めあて) 7/10 7/17 9/4	プール納めの記録と様子 9/7(めあて)
Y 男	見学、腕が回らない、ひざが曲がる。6m	ビート板バタ足といぬかきの手、意欲づけ 6m10 12m00 20m05 12m00	飛びこんで足つき、その後手平バタ足で完泳6m00
N 女	顔つけがいやそうで顔を拭きたがった。水中で息がけなかった。14m	水中声出し、息継ぎをしながらのビート板バタ足、顔を拭かない練習等、めあて 20m00 24m00 17m00	友達の応援をした。 見学
O 男	顔を前に上げた。腕がうまくかけなかった。20m	枕にして(耳を肩につけて)息継ぎ練習。息継ぎをしながらのビート板バタ足。 20m00 50m00 見学 52m00	意欲的に取り組んだ。自己ベストを更新。顔はやはり前に上げた。57m(55)
M 男	普通以上に寒かった。巧致性に欠け、腕でうまくかけなかった。14m	仲間意識の高揚。けのびバタ足。いぬかきの手。具体的めあてでの意欲づけ。励まし 15m00 見学 15m05 10m05	自分でビート板バタ足で泳ぐ。意欲はあったが寒かった。ビート板40m00
S 男	寒がり、全力を出そうという意欲に欠けた。20m	息継ぎをしながらのビート板バタ足のインターバル(持久力の育成)記録の意欲づけ 40m40 65m00 74m70 40m00	意欲的に取り組み、自己ベスト更新。60でやめそうになったが続けた。80m(80)
I 女	意欲はあったが腕が水面から出ない。バタ足がひざが折れていた。20m	けのびバタ足。背バタ足。息継ぎをしながらのビート板バタ足。 欠席 見学 見学 15m00	意欲的で記録を意識して取り組めた。自己ベストを更新した。25m00
Y 女	顔をすぐ拭こうとした。水中で息が吐けなかった。13m	水中声出し。顔を拭かない練習。息継ぎをしながらのビート板バタ足。めあて 14m05 見学 14m05 15m05	ほとんど息継ぎしないで、面かぶりクロールで泳いだ。15m00
U 男	欠席。水中で目をつむる蛇行。力みすぎ。14m	水中石ひろい。息継ぎビート板バタ足 欠席 欠席 15m00 20m00	目をつむり、蛇行したが自己ベスト更新。28m00
K 女	欠席。やや顔を前に上げる。全力でやろうという意欲に欠けた。20m	息継ぎをしながらのビート板バタ足のインターバル(持久力の育成)記録の意欲づけ 欠席 欠席 20m00 26m00	記録を意識して意欲的に取り組み、自己ベストを大きく更新した。67m(40)
I 男	欠席。平泳ぎを好んだ。えらいのはやめようとした。20m	息継ぎをしながらのビート板バタ足のインターバル(持久力の育成)記録の意欲づけ 欠席 欠席 32m00 54m40	友達(沢)を意識し、記録向上に意欲的だった。自己ベスト。66m(80)

※バスケットボールにおける実践例

(1) ねらい

- ① 自ら課題を持ち、すすんで動こうとして楽しくゲームすることができる。
- ② チームで協力し、少しでも勝つ工夫をして、練習、ゲームができる。
- ③ ルールを守り、公正にゲームをすると共に、正しいマナーと態度を身につける

(2) 具体的方針と指導上の配慮事項

個々に学習の見通しやめあて、さらに学習の記録や、評価をその次に生かして行けるように、学習カードを利用した。
(個人カード、グループカード)

ルールなしからスタートして、自分たちがゲームをすすめていく中で、その都度問題点を話し合い、ルールを1つずつ決めていった。①ゴールに入れたら得点 ②人を押さない ③人をつかまない ④取り合いはジャンプボール ⑤ラインなし、かべにつかえたら相手ボール ⑥ゴールは3つで高3点、中2点、低1点。

(3) 要容例① ～動きがぎこちなく、バスがもらえない。T・Mの例～

身体がかたく、小柄で巧微性に欠けるT・Mは、最初のためしのゲームやボールは慣れでは、ボールを恐がり、ボールが手につかず、キャッチミスを繰り返した。ゲームでもほとんどボールをもらうことができなかった。しかし、教師の励ましや仲の良い友人の声かけにより、学習時間がすすんでも1人でドリブルや低いゴールを使っている練習をしたり、教師をつかまえてバスリレーをしてシュート練習をすすんでやろうとした。さらには、休憩時間にも教師に相手をしてくれとたのみ、常にボールにさわろうという努力を重ねた。はじめは、すぐえらいと言ってやめたり、バスリレーもうまく行えず、シュートもほとんど入らなかったが、努力の成果が見えはじめ、バスリレーをして低いゴールにシュートすることができ始めた。しかし、今後の課題として、ゲームの中でいかに生かせるかであり、指導中である。

(4) 考察と今後の課題

2学期の運動会前の忙しい時期の6時間ほどの指導であったが、みんながめあてをそれぞれに持って、意欲的に取り組めたように思う。それは、休憩時間のバスケットボール遊びの意欲からもうかがえた。こうして、学習したことが、少しでも休憩等に生き、生涯スポーツに発展していくことができればと思う。しかし、個人差が非常に大きく、一人ひとりをどうゲームの中で生かして、その運動の本当の楽しさを体得させるための工夫がまだまだ必要であると痛感した。環境を整え、すこしでも生徒一人ひとりがすすんで生き生きとからだを動かすことができることを望みたい。

バスケットボール学習カード (個人カード) (グループカード)

氏名	学習目標	学習内容	学習成果	学習評価
Y 男	バスケットボールのルールを学ぶ	バスケットボールのルールを学ぶ	バスケットボールのルールを学ぶ	バスケットボールのルールを学ぶ
N 女	バスケットボールのルールを学ぶ	バスケットボールのルールを学ぶ	バスケットボールのルールを学ぶ	バスケットボールのルールを学ぶ
O 男	バスケットボールのルールを学ぶ	バスケットボールのルールを学ぶ	バスケットボールのルールを学ぶ	バスケットボールのルールを学ぶ
M 男	バスケットボールのルールを学ぶ	バスケットボールのルールを学ぶ	バスケットボールのルールを学ぶ	バスケットボールのルールを学ぶ
S 男	バスケットボールのルールを学ぶ	バスケットボールのルールを学ぶ	バスケットボールのルールを学ぶ	バスケットボールのルールを学ぶ
I 女	バスケットボールのルールを学ぶ	バスケットボールのルールを学ぶ	バスケットボールのルールを学ぶ	バスケットボールのルールを学ぶ
Y 女	バスケットボールのルールを学ぶ	バスケットボールのルールを学ぶ	バスケットボールのルールを学ぶ	バスケットボールのルールを学ぶ
U 男	バスケットボールのルールを学ぶ	バスケットボールのルールを学ぶ	バスケットボールのルールを学ぶ	バスケットボールのルールを学ぶ
K 女	バスケットボールのルールを学ぶ	バスケットボールのルールを学ぶ	バスケットボールのルールを学ぶ	バスケットボールのルールを学ぶ
I 男	バスケットボールのルールを学ぶ	バスケットボールのルールを学ぶ	バスケットボールのルールを学ぶ	バスケットボールのルールを学ぶ

2 養護・訓練

〈 10分間走 〉

(1) ねらい

- ・持久走をすることによって、筋力や全身的持久力、心肺機能の向上を図る。
- ・走ることの意識向上を図り、一人ひとりの能力に応じためあてに向かって努力する態度を養う。
と共に日々の努力の積み重ねの大切さを知り、かつ競争心を培う。
- ・長距離を自分の力をふりしぼって最後まで走ることで、根気強さや粘り強さを養う。

(2) 主な内容

鳥取～米子マラソン(10分間走)

(3) 方針と手だて及び指導上の留意事項

- ・実態に応じた一人ひとりのめあての設定。(表1 めあて一覧表)
- ・1周300メートルのコースで半周(150メートル)走るとに竹ぐしを1本ずつ渡し、もらった竹ぐしの本数が、自分の記録(評価)となる。
- ・基本的に一週間(5～6回)単位で各自のめあてをチェックし、続けて達成ができていれば、少しずつめあてをあげていく。

米子まで走ろう
* 100 km //



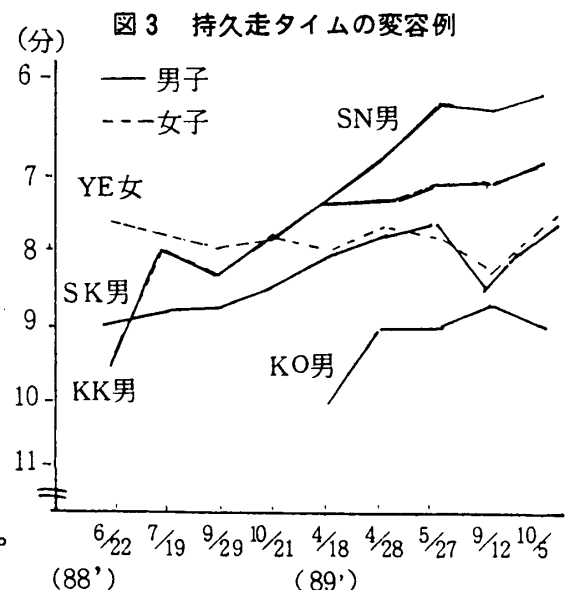
- ・生徒の実態に合わせて、「米子まで走ろう」「倉吉まで走ろう」の表を設定し、自分で走った距離をシールをはることで確認させ、意欲づける。
- ・毎日の運動の(特にマラソン)積み重ねが、大切であることをおさえさせこの成果がマラソン大会や記録会につながることを意識づける。
- ・個々の実態や走力の実態に応じて、声かけ、励まし、賞賛、前から、あるいは後ろからの伴走、めあての具体化、スタート位置の工夫等を心がける。

(4) 実践例

右の図3は昨年度からの持久走(男子1500メートル、女子1000メートル)のタイムの変容を

抜粋して表したものである。このように朝の活動での10分間走で、自分の能力に応じためあてに向かって努力した成果が、表われてきているよい例であると言えるであろう。なお、他の生徒においても自分のめあてに応じて、全般的に少しずつではあるが、記録の伸びが見られる傾向にある。

さらには、意欲面での変容については次の通りである。



(※ S、N、K、Oは1年生のため 89'4/18～)

はじめの実態例	具体的な手だてと配慮事項	変 容 例
<ul style="list-style-type: none"> ・「えらい」「マラソンはいやだ」などの意識を持ち、途中で速度が落ちてしまった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の能力に応じた具体的なめあての設定。短い距離（半周）で竹ぐしをもらうことによって、アクセントをつけさせる。米子まで（倉吉まで）走ろうの表によって自分の努力の成果を確認させ、競争意識を持たせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のめあてを達成すると拍手して歓声をあげ、また達成できなくても、「次がんばるけ」と言った。走っている途中、もう少しでめあて達成という時に体育館からの他学部の笛を「終わり」の合図とまちがえ、止まってしまう、めあてが達成できず、教師に泣きながらくやしさを訴えた。
<ul style="list-style-type: none"> ・走るという意識が薄く、途中で止まったり、歩いてしまった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・伴走の工夫（声かけ、励まし、前からの走、後ろからの走など）。 ・めあての評価の仕方の工夫、賞賛、意欲づけ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・途中で歩いたりせず、声かけで走り続けられるようになった。
<ul style="list-style-type: none"> ・スタートでつまずき、座りこんでしまって、走ろうとしなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スタート位置の工夫。みんなより前からスタートさせ、気おくれしたり、自信を失わせないようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・すすんで竹ぐし等の準備を手伝い、そして完走でき、スタートでつまずかなくなった。



※ 10分間走めあて一覧表

平成元年度		朝の活動（10分間走）の記録															数値は竹ぐしの数……………1本が150 m														
	めあて	5・23	24	25	31	6・13	めあて	6・14	17	20	22	27	めあて	6・29	30	7・1	4	6	7	めあて	7・8	11	9・5	21	27	29	めあて	9・30			
M男	8	・	⑧	⑩	⑧	6	9	8	6	⑨	⑨	⑨	9	⑨	⑨	⑨	⑩	⑨	⑨	10	9	9	7	7	7	8	9	7			
S男	13	・	⑬	⑬	⑬	⑮	14	⑭	12	⑭	13	13	14	13	⑭	13	・	12	⑭	14	⑮	⑭	12	⑭	⑭	⑭	14	⑮			
Y男	10	・	⑪	⑪	・	⑬	11	⑫	⑪	⑪	10	⑬	11	⑬	⑬	⑪	⑬	・	⑬	12	⑭	⑬	⑫	⑬	⑭	⑬	12	⑫			
O男	11	・	9	8	⑪	9	11	⑫	10	8	10	10	11	10	10	⑪	⑪	9	⑪	11	10	⑪	9	8	10	9	11	⑫			
N男	12	・	⑫	⑫	10	11	12	⑫	⑬	11	11	11	12	⑫	10	11	⑫	⑫	⑫	12	⑬	⑬	⑫	10	10	⑫	13	12			
N女	12	・	9	⑫	⑫	⑬	12	⑬	⑬	⑫	⑫	⑫	13	10	9	9	10	11	11	12	10	11	11	⑫	⑫	11	12	⑫			
Sa女	2	・	③	③	③	③	3	④	④	④	⑤	③	4	④	3	⑥	④	1	⑤	4	2	2	④	3	④	④	4	④			
T女	3	・	③	④	③	・	3	③	・	④	・	③	3	③	⑤	・	⑥	④	④	4	・	④	⑥	⑥	⑦	⑤	5	⑥			
Sk女	3	・	④	③	③	③	3	・	2	1	③	2	3	④	④	③	③	③	③	3	2	2	③	③	③	③	3	③			
O女	8	・	⑧	7	⑧	⑧	8	⑧	⑨	⑧	⑨	7	8	⑧	⑧	⑧	⑨	⑨	⑨	9	8	⑩	⑨	⑨	⑨	⑨	9	⑩			
K男	10	⑫	⑫	⑪	⑪	⑫	11	・	⑪	⑪	⑪	⑪	11	⑪	⑪	⑪	⑪	⑪	⑪	12	11	11	11	⑫	⑫	11	12	⑬			
M男	13	12	⑬	11	10	・	12	・	・	・	2	2	12	6	⑫	・	2	・	・	12	・	2	11	5	・	・	12	⑬			
Y女	10	⑩	9	⑩	⑩	⑩	10	・	⑩	⑪	⑩	9	10	⑩	⑩	⑩	⑩	9	⑪	10	⑪	⑫	⑩	⑩	⑩	⑩	11	10			
E女	12	⑬	⑬	⑬	⑬	⑬	12	・	⑬	⑬	⑬	⑬	12	⑬	⑫	・	⑬	⑬	⑫	13	⑬	⑭	・	⑬	⑬	⑭	13	⑭			
I女	7	⑦	⑦	⑦	⑦	⑦	7	・	⑧	⑦	⑦	6	7	⑦	6	⑦	⑦	6	・	7	⑦	⑦	・	6	6	⑦	7	⑦			
F女	6	⑦	⑥	⑦	⑥	⑥	6	・	⑥	⑥	⑥	⑥	6	5	5	5	⑧	⑧	⑥	6	5	⑥	5	⑥	5	⑥	6	5			
S女	8	6	6	7	・	・	8	・	6	3	4	4	6	1	・	5	5	・	・	5	・	⑥	4	・	・	⑤	5	・			
U男	11	6	10	10	⑫	⑪	11	⑪	⑪	⑪	⑪	⑪	12	・	・	・	・	・	・	12	・	・	⑪	⑪	⑪	⑪	11	⑪			
K男	9	6	6	⑪	8	⑩	9	⑩	⑩	⑩	⑩	⑨	9	・	・	・	三	・	・	9	・	・	7	⑩	8	⑨	9	8			
I男	9	⑪	⑨	⑪	⑪	⑫	10	⑩	⑪	⑪	⑪	⑩	10	・	・	・	年	・	・	10	・	・	⑩	⑩	9	⑪	12	11			
Tk男	・	・	入院	加療	中	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	生	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・			
T男	7	⑧	⑧	⑧	5	⑧	7	⑧	⑨	⑧	⑦	⑦	8	・	・	・	現	・	・	8	・	・	⑧	⑧	⑧	⑧	8	⑧			
K男	13	⑬	⑬	⑬	⑬	⑬	14	13	⑭	13	⑭	13	14	・	・	・	場	・	・	14	・	・	12	12	13	13	14	⑭			
Y女	8	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	9	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	9	・	・	・	実	・	・	9	・	・	⑨	⑨	⑩	⑩	10	9			
I女	10	⑪	⑪	⑫	⑬	⑭	11	⑬	⑬	⑪	⑩	⑩	11	・	・	・	習	・	・	11	・	・	10	10	10	10	11	⑪			
K女	11	⑪	⑫	⑫	10	⑪	11	8	⑪	⑫	⑫	⑫	11	・	・	・	中	・	・	11	・	・	9	⑪	⑫	⑫	11	⑫			
M女	8	⑧	⑧	⑧	1	7	8	6	6	6	7	7	8	・	・	・	・	・	・	8	・	・	6	7	6	6	7	⑦			

※ ○……めあてが達成されたもの

課題別トレーニング

a 1 グループ（肥満）

(1) 生徒の実態

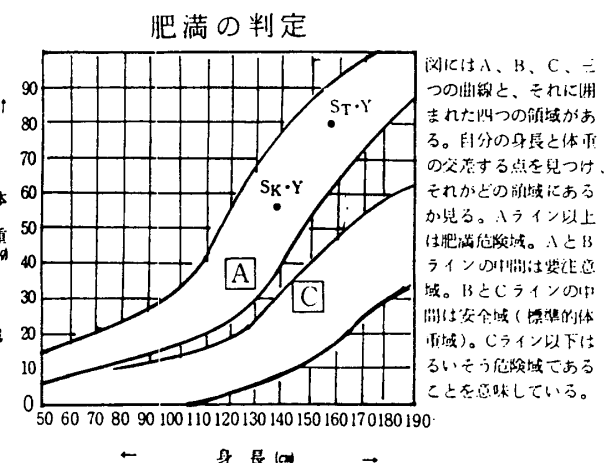
このグループは、肥満防止が重点課題となっている4名の中でも、認知力や自己抑制、身体意識等に大きな遅滞がみられるために、体重の軽減が運動量の面だけではむずかしいST・Y（高1女）、SK・Y（高1女）の2名で編成されている。

ST・Yについては、精神遅滞も大きく、行動が緩慢で集団的なとりくみが困難であり、身辺処理もまゝならないが、食欲だけは旺盛である。そのため超肥満児といえる。（身長1.51 m・体重80 kg・ローレル指数208・体脂肪率43.7・達城寺式発達検査2：5）

SK・Yについては、ダウン症・てんかんが重複した精神遅滞児であり、ST・Yと同様、行動が緩慢で、口腔などの発語器官と関係する構音障害が顕著である上に、ダウン症の特色である身長伸びが少なく、体重だけは、すこし油断するとすぐ増加する状態である。（身長1.35 m・体重57.8 kg・ローレル指数234・体脂肪率44.1・達城寺式発達検査2：4）

また、右の表にみられるように、この二人の生徒は「肥満危険域」にあり、成人期に向けて、緊急な対応が求められている。

なお、家庭と連携して「栄養と食事」の改善についての課題があるものの早くに父親と死別し、母親が生計をささえるために勤めをもち、家庭での取り組みを要請する上で困難な事情が多かった。



(2) 養訓グループのねらい

- ・ 自己認知につながる身体意識の形成
- ・ 微細運動を巧みに行うための大筋群の協応性の形成
- ・ 動的バランス能力の向上
- ・ 筋力強化と運動量の増加による肥満の軽減

(3) 実施課題のねらいと指導上の留意点

各実施課題に応じたねらいと指導上の留意点は次の通りである。ただしグループ全体としての表であり、個別には重点項目を決めてとりくんでいる。

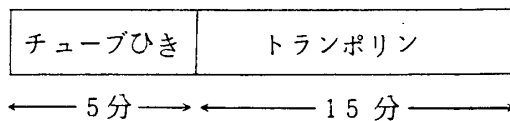
実施内容	ね ら い	指 導 上 の 留 意 点
・ チューブひき	筋力の強化（特に腹筋）・引力	介助しながら正確にさせる。
・ トランポリン	身体意識の形成・バランス能力	立位・座位等にも考慮する。
・ 四輪車（一輪車）	運動量の増加（抽出養訓の扱いで）	ST・Yについては、発汗効果もねらう。

(4) 指導方針及び指導の実際

・ 指導方針

「朝の活動」の中の20分程度の指導であるため、活動内容をパターン化して実施してきた。また、運動量増加の面では、この時間帯では十分なとりくみとはならないので、「抽出養訓」的な扱いとして、「生活一般」・「教科学習」の場面で抽出し、サーキット・自転車・のり・運搬などを加味した取り扱いの中で、移動・運動量の強化をはかってきた。

・ 指導の実際



上図のようにパターン化した取り組みを継続してきた。特に、トランポリンについては、この生徒たちも関心を示し、自らこのとりくみを受容し、主体的に応じる姿勢を示しはじめている。



なお、「抽出養訓」的な扱いをとってきた「運動量の増加」をねらうとりくみ（四輪車・

一輪車）については、生徒の興味・関心に依拠したとりくみとして、時間的には制約があったが、積極的な参加をみることができた。

また、昨年来の継続的な研究課題（研究紀要第10集参照）として、言語能力の向上のための養訓的指導も加味して取り組んできた。

(5) 変容について

肥満解消の課題としては、家庭との連携でとりくむ「食事と栄養」の改善が家庭の事情からむずかしく、そのため体重やローレル指数の変容をみるかぎり肥満に歯止めをかけることはできなかった。しかし「体格と体位の実態と特徴」（P104）のところで示した「体脂肪率」の変化をみると、着実に減少してきている。このことは、脂肪の部分が減って筋肉が増強されていることであり、日常生活での動きが、昨年よりよくなってきている。

(6) 考察及び今後の課題

超肥満のために動きが緩慢となっている上に知恵おくれで自己抑制がむずかしいこれらの事例では、周囲の「食生活」の改善への理解や協力がなければ根本的な解決にむかわないことを痛感した。今後、学校のとりくみを家庭にも広げ、できるかぎり日常生活の中でも「動き」の場面を多く設定していきたい。なお、次に掲げる実践例は、このグループの集団的取り組みからはなれて、個別の取り組みとして行なっているものである。

St・Yへの乾布摩擦の取り組み

(1) 基本的な考え方

本児のからだの目標は、「肥満を軽減し、動きやすいからだを作る」ということである。そのために指導者は、本児の運動量を増やすことに力点をおいて、日々取り組んできている。昨年までは、サーキットトレーニング・ボール運動・リズム運動を通して本児の運動量を増やそうと試みてきたが、本児の興味の薄い内容であること、能力的にみても難しく、実態に合わない内容であること、またそれらの運動は下肢に大きな負担を与え、歩行のゆがみを生じさせる等が指摘され、取り組みの見直しが為されることになった。また食事制限による肥満の軽減にも取り組んできたが、家庭との連携がうまくいかず、それらのことも本年度の課題として残された。

これらの昨年度の反省をいかし、今年度はまず体の内面の活性化から図っていくことにした。動的運動だと心肺機能の予備力が低下してしまい逆効果であり、極度の肥満児にとっては、最初は静的運動から求めるのがよいと考えたのである。静的運動としては、ヨガや美容体操等が挙げられるが、これらの能動的運動は本児にとって行うことができないものである。そこで第三者が本児に働きかけることによって行うことのできる静的運動として、乾布摩擦を採用することにした。乾布摩擦による効果の一つとして、汗腺を開き発汗作用を促進する働きがある。本児の皮膚は汗腺が閉じてしまい、発汗しにくい状態になっている。つまり肥満を軽減しにくい体になっているのである。そこで、乾布摩擦により、発汗しやすい皮膚の状態にするとともに、発汗作用を促すウェアを着用させて、歩行させる取り組みによって、本児のからだの目標に迫ろうと考えた。

(2) 実践事項とねらい

実 践 事 項	ね ら い
<p>① 乾布摩擦 本児の下着のみ着用させ、テープを流す。それに合わせて指導者が声かけしながら、乾いたタオルで、全身を擦る。その時皮膚の色がうっすらと赤くなるぐらい擦る。</p> <p>② ウェア着用による歩行 発汗作用を促すウェアとして雨ガッパを着用させる。そして他の生徒がマラソンをしている中を歩かせることにより、少しでも他者からの刺激を受け、自発的に歩くようにする。また歩行後シャワーを楽しみにさせ、それを意欲づけにする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 中枢神経を興奮させ、それによって全身の各器官や組織を統御している神経系・ホルモン系の機能を活発にする。 情動の発達と言語への反応に大きな働きをし、体表面の毛細血管が拡張し、血液の循環をよくする。 汗腺を開き、発汗作用を促す。 ウェアを着用することにより、保温効果を高め、さらに発汗作用を促進し、肥満を軽減する。

(3) 考察及び今後の課題

本児自身はこの取り組みに対して強い関心を示し、「カセットをかけるよ」の合図だけで自分から服を脱ぎ、催促してきた。そして乾布摩擦の間は、リズムにのって一杯体を揺らし、この時点でもうっすらと汗をかくほどであった。さらに次のウェア着用の歩行へとつなげることで、発汗に関しては大きな効果があったのではないと思う。4月からみると、体重そのものは2キロ増加しているが、体脂肪率に関しては、6月に43.7%であったのが、10月には38.2%と5.5%も減っている。これは少しずつではあるが脂肪が筋肉に変わってきているということである。行動面においても4月より指示がよく通り、座りこんで動かなくなるということもほとんどなくなった。行動範囲も広がり、〔雨ガッパを着て歩くSt・Y〕運動量も増加してきている。今後の課題として、短時間でもよいから毎日継続し、かつ家庭との連携プレーで、体重そのものも減らしていく必要があると考える。



a 2 グループ

(1) 生徒の実態

下記の表に示すように知的な障害は軽い方であるが、肥満傾向があり、動作が緩慢で動こうとする意欲に乏しい。自分が肥っているという自己認識ができ、やせたいという気持ちがあるので目標をもたせて、取り組ませることができる生徒達であるといえる。

	I.Q(田中B式)	身長 (cm)	体重 (kg)	ローレル指数	体脂肪率 %
H・O (1年)	55	170.8	87.5	176	43.1
K・I (2年)	67	160.5	76.2	184	48.7

(2) ねらい

本人に意識させながら活動量を増やし、肥満を軽減する。

(3) 実施課題のねらいと指導上の留意点

実施内容	ねらい	指導上の留意点
腹筋運動	筋力	補助具なしでは1回もできないのでチューブを補助具として利用する。
なわとび・ダンス	全身持久力・調整力	長時間一定時間を設けて続けさせるようにする。
トランポリン	調整力	めあてを決め意欲的に取り組ませる。

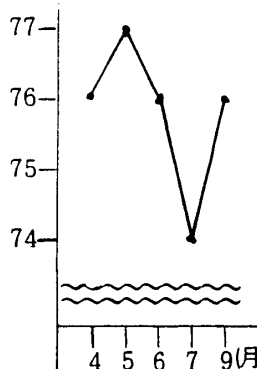
(4) 指導の方針及び指導の実際

- 運動量を増やしてカロリー消費することが、肥満の軽減につながることを理解させ、自主的に取り組む意欲をもたせる。
- 適宜取り組みの努力を賞賛し、活動意欲を高める。

トランポリン	腹筋運動	なわとび・ダンス
← 5分	→ ← 5分	→ ← 10分

(5) 変容例 — K・I (高2女) の場合 —

(kg) <体重の変化>



4月当初は、チューブを使っの腹筋運動が、10回以上連続してできなかったが、今では、50回続けることができるようになった。汗をかくことも多くなった。

左のグラフに示されるように、体重の変化を見ても、課題がある程度達成されたことがわかる。体脂肪率も43.7%と減少してきている。(9月に体重が増えたのは、夏休みをはさんだためである。)



〔腹筋運動をするK・I〕

(6) 考察及び今後の課題

運動をしてカロリー消費をすることが重要であることが自覚でき、エアロビクスダンス、腹筋運動、なわとび等に積極的に取り組みその結果、からだの動きや体質に少しずつ変容がみられた。今後も生徒達が楽しんで取り組むことのできる課題を準備することが大切であり、必要な運動を盛り込みつつも楽しんでできる内容を再検討していきたい。

bグループ

(1) 生徒の実態

男子1名、女子3名計4名（てんかん1名、小頭症1名、ダウン症2名）で、比較的知的な発達の遅れた生徒達で構成されている。実態としては、筋力が弱く、動きの発達が未分化で協応動作ができにくく、進んで運動をしようとしなない等があげられる。



(2) ねらい

- からだの調整力や筋力を高める。

(3) 実施課題のねらいと指導上の留意点

実施内容	ね ら い	指 導 上 の 留 意 点
コンビネット	集中力・バランス感覚	生徒の実態によっては、手を支えないで渡らせる。
つり橋	集中力・バランス感覚	生徒の実態によっては、つり橋を揺らしたりする。
平均台	集中力・バランス感覚	生徒の実態によっては、手をつかないで昇り降りさせる。
鉄 棒	筋力(特に握力・背筋力)	鉄棒のにぎり方に注意させる。
丸太わり	集中力・バランス感覚	恐怖心を与えないように徐々に手を離していく。
とび石電柱	集中力・バランス感覚	生徒の実態によっては、走って渡らせる。
すべり台	筋力(特に握力・背筋力)	すべり台を逆に昇る際、すべり台を持つ手に注意をさせる。
ジャングルジム	筋力(特に握力・背筋力)	棒のにぎり方に注意させる。目標を持たせる。

(4) 指導方針及び指導の実際

- 毎日の活動内容をほぼ同じにし、見通しを持って取り組み、また、運動機能の向上が少しでも認識できるようにする。
- 少しの変容も見逃さず激励し、運動意欲を高めるようにする。

コンビネット	つり橋	平均台	鉄 棒	丸太渡り	とび石電柱	すべり台	ジャングルジム
← 2 分 →	← 3 分 →	← 2 分 →	← 2 分 →	← 2 分 →	← 2 分 →	← 3 分 →	← 4 分 →

(5) 変容例 — Y・F (2年女) の場合 —

変容の 目立った 課 題	平均台	片手をついて昇り降りする。→ 手をつかず昇り降りする。
	鉄 棒	20秒間程ぶら下がる。→ 1分以上、ぶら下がる。
	ジャングルジム	つたい歩きで¼周して止める。→ つたい歩きで2周する。

○ 全体的にみて、Y・Fは、声かけをしなくても人の動きを見ながら次々と実施課題に取り組むようになってきた。指導で重視した調整力の中の特にバランス感覚については目立った変容は見られなかったが、筋力については、少し高まってきたのか、ジャングルジムや鉄棒へ取り組む時間が始めに比べて少し長くなってきた。

(6) 考察及び今後の課題

トレーニングにより、どの生徒も指示を受けなくても進んで取り組み、しかも、筋力等もほんのわずかではあるが高まってきたのではないかと考えられる。しかし、調整力においては目立った変容が見られないので、実施課題について検討を加えて、今後も指導していきたい。

c 1 グループ

(1) 生徒の実態

本グループは、自閉的傾向の生徒3名、崩壊性行動障害の生徒を含む計6名で、比較的集団での活動ができにくい生徒達によって構成されている。体格・体位では、健常児の高校生と同じような発達がみられるが、体力テスト（P 141参照）の結果によれば、背筋力・立位体前屈・伏が上体そらしに落ちこみがみられ、筋力・柔軟性に劣っていることが指摘されている。また、運動経験の不足等にもより、動きがぎこちなく、動きそのものが未分化で、巧み性・協応性など調整力に欠ける面もみられるグループである。

(2) ねらい

個別に運動を楽しませながら、筋力・パワー、調整力を高める。

(3) 実施課題のねらいと指導上の留意点

実施内容	ねらい	指導上の留意点
腕立て伏せ・手押し車	筋力・パワー	体格の似た生徒同士をペアにする。
腹筋運動・上体そらし	腹筋・背筋力	めあてを決め意欲的に取り組ませる。
スキップ	協応性	スキップの中に腕の動きも入れる。
柔軟運動	柔軟性	急な曲げ伸ばしをさせない。



(4) 指導の方針及び指導の実際

- 実施内容をパターン化し、見通しを持って取り組ませる。
- めあてを決め、意欲的に取り組ませ、運動の効果上げる。

スキップ	柔軟運動	腹筋運動・上体そらし	腕立て伏せ	手押し車
← 2分 →	← 3分 →	← 7分 →	← 3分 →	← 5分 →

(5) 変容例 — Y・U（3年男）の場合 —

実施内容	4 月 の 実 態	現 在（ 9 月 ） の 実 態
スキップ	足の動きだけの時はうまくできるが、腕の上げおろしをつけるとリズムが崩れ、足がもたつく。	スキップをしながら、リズミカルに腕の上げおろしができ、「ウン、パッ」と言って腕の上げおろしのリズムをとっている。
柔軟運動(前屈)	ひざを曲げないとできない。	ひざは伸ばせるが、まだ顔が足につかない。
腹筋運動	ひざを曲げて、5回がめあてだった。	めあては30回で足を伸ばしてできる。
手押し車	つき山を上がるまでに3回休まなければ上がれなかった。	つき山を1度も休まずに上がれることが多くなってきた。

(6) 考察及び今後の課題

4月当初よりも実践を重ねるにつれて、柔軟性においては顕著な変容がみられた。今まであまり使わなかった部位の機能が潤滑になり、動きも自然になってきた。今後もこの内容で取り組みを続け、さらに筋力・パワーの向上をねらっていきたいと考えている。

C 2 グループ

(1) 生徒の実態

男子 6 名、女子 5 名 (内、てんかん 2 名) の計 11 名で、障害の程度は比較的軽く、運動能力は本校高等部の中でも高い方のグループである。しかし P140 の運動能力テスト、体力診断テストの結果からでもわかるように、身体的には障害がなくても、発達の遅れや運動経験不足から、体力の要因の中でも、調整力、筋力は特に劣っている傾向にある。ここでは発達段階から見て、調整力を含めて、筋力の向上に重点をおきながら指導した。

(2) ねらい

- ・集団で関わりを持たせながら、筋力、敏捷性、調整力を高める。

(3) 実施課題のねらいと指導上の留意点

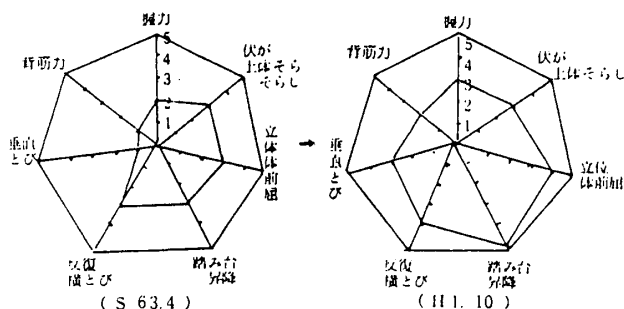
指導内容	ねらい	具体的内容と指導上の留意点
・棒ひきリーグ戦 ・個人戦 ・団体戦	・相手に勝とうとする意識を持ち、身体の各部位の筋力を高める。	・2人組でリーグ戦形式でやらせた。押しったり、あましたりしないようにさせ、そして足の位置、かまえ方等に留意させた。
・うで回し、握力を高める運動	・主に上腕の筋力と、握力を高める。	・うでが下がらないように、腕回しを 1 人 10 回ずつ大きな声を出してさせた。テニスボールを握らせて、10 回×12 人を 1 セットとした。
・ボールを使った運動	・ボールを使って、主に調整力を高める。	・サッカー的内容とバスケットボール的内容を取り入れた。

(4) 指導の流れ

棒ひき	ゲーム (サッカー・バスケットボール等)	腕回し、握力を高める運動
5 分	10 分	5 分

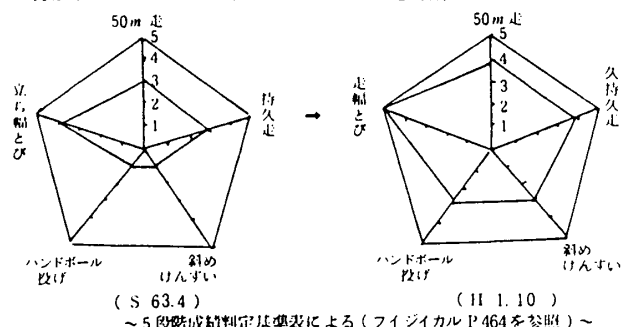
(5) 変容例 — S・K (高 3 女) —

※ 体力テストでの変容 (P140 参照)



特に筋力 (握力、背筋力) において低い傾向にあったが、敏捷性、持久力も含めて総合的に体力がきつ々ある。

※ 運動能力テストでの変容 (P140 参照)



特に筋持久力 (斜めけんすい) と投力が劣っていたが、運動経験の拡大によって伸びてきている。

(6) 考察及び今後の課題

やはり体力の落ちこんでいる分野のみを養うのではなく、そこを重点として総合的に体力をつけていくためには、多様な運動経験の拡大と継続が大切であると考えられる。

d グループ

(1) 対象児 H・Y (1年男)

(2) 実態と問題点

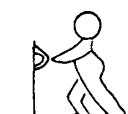
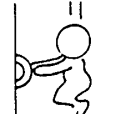


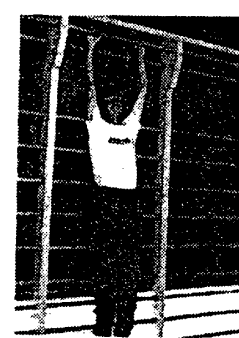
- ・ 脳性マヒの後遺症で、身体各所(特に下肢)に変形が見られ、左足が1.5 cm短い。
- ・ 背中が曲がり、姿勢が悪い。
- ・ 照明付足型判別器(UCHIDA)にのると、体重が右足にかかり、左足ひざが曲がっている。また足を広げると、床に足がつかない。(屈曲し、浮いてしまう。)
- ・ 足指間にすきまがなく、つまさきに寄っている。そのこともあって、かかと浮かして、指先で立つことが短時間しかできない。
- ・ 扁平足である。
- ・ 筋緊張がたえずおこりがちである。

(3) 基本的な考え方

Y・Hに対する取り組みとして、中学部までは下肢の変形と拘縮化を防ぐための訓練と同時に、障害が軽減されることもねらいとしてきた。しかし成人期に向う本児の筋肉は拘縮化が強まってきているため、高等部では、身体の変形を防ぐことのみに力点をおいて訓練を実施することにした。中でも下肢の筋肉と背筋の変形を防ぐために、訓練中は精神的にリラックスさせることも考慮し、かつ毎日短時間でも反復訓練を行うことの習慣化を目指し、実践してきた。

実践事項は以下の通りである。

(4) 実践事項とねらい

ね ら い	実 践 事 項
① 下肢の筋肉を伸ばす。	<p>ア 片足ずつ足の後ろの部分伸ばす……………30回ずつ(図1)</p> <p>イ かかとを上げて、立ったりしゃがんだりする……………10回(図2)</p>   <p>(図1) (図2)</p>
② 背筋を締め、腹筋を伸ばす。	<p>ア 体を弓なりに反らす。……………10秒(図3)</p> <p>イ ぶら下がる。……………30秒～1分を2回(写真)</p> <p>ウ 椅子に座って両手を反らし胸をはる。……………10回(図4)</p>   <p>(図3) (図4)</p> 

(5) 今後の課題と問題点

本児については、継続的に取り組む必要がある。本人もかなり意欲的に取り組むことができた。しかし体育的行事や現場実習が重なったこともあり、前期は数回の訓練にとどまってしまった。しかも学校でのこの実践を、家庭での本人の自主的な取り組みにまで発展させることができなかった。よって今後の課題としては、学校だけでなく、毎日短時間でも家庭で自主的に取り組める方向を目指していくことが挙げられる。

B 生活場面でのからだづくり

(ア) 楽しい活動を通して

ここでは、生活場面の中でも、特に生徒達が喜ぶ楽しい活動場面でのからだづくりを取りあげ、概述したい。それらの取り組みの場としては、高等部の教育課程の中では、行事単元学習の「キャンプ」、「学習発表会」、家庭科「調理」があげられる。

生徒達が、集団の中で友だちとかかわり合い、楽しみ喜んで取り組むからだづくりの場が、ここで取りあげる「生活場面でのからだづくりー楽しい活動を通してー」の実践場面である。従って、この場でのからだづくりは、活動面の技能よりも、活動を通して生徒達がどれ程だけ生き生きと主体的に取り組んでいるのか、その意欲を評価する場と考えている。

行事単元学習「キャンプ」での実践

(1) はじめに

高等部では、行事をテーマに据えた総合学習の形態を行事単元学習と呼んでいる。行事単元学習としては、「キャンプ」と「学習発表会」を設けているが、ここでは、既に実施した「キャンプ」を取りあげ、「キャンプ」を通してのからだづくりについて述べてみたい。

「キャンプ」は、高等部が7月の中旬に実施する野外学習の1つである。その行事の内容には、野外炊飯、テント設営、キャンプファイヤー(だしもの発表を含む)など楽しい活動が含まれている。また、事前学習にも、それらの活動内容の事前学習に加えて買いだし等があり、生徒達はそれらの事前学習を楽しみながら行っていく中で、当日への取り組み意欲を高めていく。自然の懐の中で行う行事であること、また生徒達が自由に企画できる部分を含んだ行事でもあるので、生徒達はこの「キャンプ」をととても心待ちにしている。

(2) 生徒の実態

高等部の生徒は、男子13名、女子14名より成る。精神発達を見れば、発達年齢2才段階の生徒から9才段階の生徒まで非常に幅の広い段階の生徒達で構成されている。概して、本校中学部から入学してきた生徒達にくらべ、他校の心障児学級から入学してきた生徒達は、読み書き、計算力などに優れているのに対し、見通しをもって自主的に活動する力や労働する力に劣っているという傾向がある。しかし他校から入学してきた生徒達も、半年も経たぬうちに、行事単元学習や作業学習・職業科を経験する中で、そのような特徴は見られなくなっていく。

(3) 指導の実際

① 指導計画(図1参照)

② 指導方針

- ・ 生徒の自主性を尊重し、生徒の発想を生かした取り組みを大切にする。
- ・ 楽しい活動を通して生徒の心を開放させる。
- ・ 友だちとのかかわりを大切にし、協力する態度を引き出す。

③ 活動の概要(表1参照)

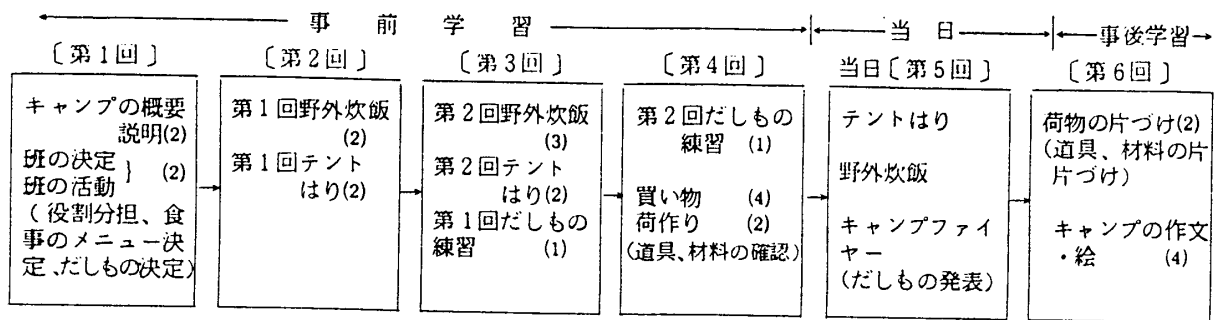



図 1 指導計画

※ () 内は時数を始す示す

内容	位置	活 動 の 概 要
買 い 物	事 前 学 習	班単位で1.5km離れたスーパーに、買いだしに行く。割当のメモを見て、全員が2品以上の買い物をする。買い物の仕方は、千円札をだしておつりをもらう者、1円単位まできちんと金額をだす者など、生徒の実態に応じた配慮を考える。自分で品物を買ひ、それを歩いて学校まで持って帰るという活動を通して、生徒達のキャンプに対する意欲も高まってくる。
テ ン ト 張 り	事 当 前 日 学 習	 <p>テントを張り、野外に宿泊することは、生徒達の楽しみの1つである。そのためには、テントを張ることができなければならない。テント張りは、①場所を決め、グラウンドシートを敷く、②支柱を立て、四方にテントを引いて張る。③テントのまわりのヒモを引いて、ペグでとめる。④フライングシートをつける、の4つの工程より成る。特に②や③の工程は、みんなで協力しなければうまくできない。それだけに、テントを張り終えた後の喜びはひとしおである。</p>
野 外 炊 飯	事 当 前 日 学 習	<p>野外で枯れ枝や薪で火をおこし、飯ごうを用いてご飯を炊く。またブロックのかまどに火をおこし、大鍋でカレーライスを作る。生徒ひとりひとりが協力し合って、火をおこしたり、米をといだり、材料を切ったり、その取り組む態度は楽しい中にも真剣である。みんなで作った食事を野外で食べる味は格別。生徒達の食欲も盛んである。最初は、なかなか火がおこせなかったり、飯ごうに入れる水の量を間違えたり、炊き過ぎてご飯を焦がしたりして大変だが、回数を経る度に生徒達の活動意欲は高まり、仕事をこなす要領も良くなってくる。</p> 
キ ャ ン プ だ し もの フ ァ ィ ャ ー	事 当 前 日 学 習	キャンプファイヤーは、生徒達が最も楽しみにしている活動である。「キャンプでは何をする?」と問えば、必ず「キャンプファイヤー」という答えが返ってくる。キャンプファイヤーでは、点火行事の後、各班のだしもの発表を行うようにしている。ここでは、各班の生徒達が知恵をだし合い、練習してきた成果が発表される。歌あり、踊りあり、寸劇あり、クイズありで大いに盛りあがる。日頃、見られない生徒達の個性や特徴がよく見られるのもこの時である。
荷 作 り ・ 片 付 け	事 事 前 後 学 習	キャンプの前日には、テント、毛布、飯ごう、大鍋、食卓台、キャンピングセット、材料等の最終確認を全員で行うようにしている。特に、キャンピングセットについては、各袋の中に、コップ、お碗、フォーク、はし、さじ、包丁、かん切りが決められた数だけそろっているかどうか、各班で確認する。その後、自分が当日持っていく小荷物を除いて、その他総ての荷物はトラックに積み込み、当日を迎える。キャンプ後は、使った道具や用具をきれいに洗い、所定の場所にきちんと片づける。

(4) 「キャンプ」におけるY・Mの取り組み

① T・M（高1男）の実態

田中B式知能検査では、IQ44であり、本校の生徒の中では低い方ではない。知的学習のレベルに比べ、身辺自立に関する課題は多く、ズックのヒモが結べない。タオルで背中が洗えない、衣服がきちんと着れない等の実態がある。また、他者に対する依頼心が強く、また活動すること、働くことに対して、自主性、積極性があまり見られない生徒である。

② Y・Mの活動の様子（主な場面を抜粋）

内 容	T・Mの活動の様子
野 外 炊 飯	一回めの野外炊飯は、見ている場面が多かった。まきをくべること、飯ごうの米をとぐことなど指示されたことを介助を受けてするのが精いっぱいであった。しかし、できないながらも表情は生き生きとしており、他の生徒のすることをまねてしようとする意欲は見られた。二回めの取り組みでは、まきを自分でもってきたり、飯ごうに米の量を測って入れる（正確ではなかったが…）など自主的な活動が少し見られた。当日においては、自ら何回も林の中に入り、枯れ枝をたくさん集めてきたり、火を吹き竹で吹いておこしたりする自主的な活動が見られた。不器用ながらも自然児のような活動が少し見られた。鼻を黒くして、火の消えたかまどを吹き竹で吹く、本児の姿が印象的だった。
テント張り	一回めは、張り方が全くわからず、側にさえ寄ってこなかった。指示された時、支柱を持っている事以外、ほとんど何もしなかった。二回めは、本児なりに、見通しがもて始め、たたんで置いてあったシートを広げたり、ペグを打つ位置がわかれば木づちで打ったりすることができるようになった。しかし、本児の打ったペグはすべて浅く、抜けてしまった。当日でも、本児は、自分ができる仕事ということで、ペグ打ちに終始した。全体を見通した仕事はできないが、ペグ打ちだけでも自主的にやろうとしたところに本児の進歩が見られた。
キャンプ ファイヤー (だしもの発表)	T・Mの班は、コマーシャルをいろいろ結びつけた寸劇を行うことになった。自分から進んで、「こうしたい」という意見は述べたりしないが、みんなが談笑することに耳を傾け、うなづいたりし、本人のやる気が感じられた。当日は、ジャイアンツの江川投手のものまねを演じ、みんなの大きな拍手を得た。また、フォークダンスにも積極的に参加し、伸び伸びと踊っていた。教室では見ることのできない笑顔のこぼれる一時であった。

③ 結果及び考察

キャンプを通して、Y・M児の生き生きと主体的に取り組む姿を見ることができた。それは、1つは「キャンプ」という行事単元自体が、楽しい活動を含んでいたということ、さらにもう1つは、学年を解いたダイナミックな集団での活動の場があったことが、効を奏した大きな要因ではなかろうかと考える。また、指導法においては、指示を多発せず、本児が他の生徒から学ぶという姿を大切にしたこと、さらには、労働する場面でも楽しさを前面にだして指導したことが良かったのではないかと考える。本児のように真の労働場面に適応できない段階の生徒には、このような楽しんで行なえる労働的活動を含んだ学習をもっと多く設定したいものだと考える。

(5) 今後の課題

行事単元学習「キャンプ」の全体的な取り組みがわかるようにしながら、真の労働場面では適応できない段階のY・Mが、楽しさを含んだ労働的活動場面では、どのような活動を見せたかまとめてみた。高等部の教育過程において職業科の占める割合は高い。そこへ到達する前段階にある生徒達には、このような楽しさを含んだ労働的活動の場をもっと多く設定すべきではないかと改めて考えさせられた。また、指導を徹底させるためには、指導計画の工夫、ティームティーチングの体制作りの確立など、さらに検討しなければならないと考えている。

(イ) 労働を通して

1 職業科

ここでは、職業科、作業学習、現場実習を通してのからだづくりの実践をとりあげてまとめることにした。楽しい活動を通してのからだづくりとは異なり、労働というどちらかといえば、意欲面の向上とともに技能の向上、作業態度の育成をねらった学習を通してのからだづくりであることに特徴がある。

まず、働くことの大切さを知り、働くことに対する気力・意欲を高め、働く意識を持たせたいと考えている。また、人とかかわり合いを大切に、基本的な行動様式を身につけ、好ましい社会的対応ができるようになることもねらっている。加えて、作業に必要な基本的技能・知識の習得を図り、反復的な訓練により身体諸機能の発達を促す、というのがこの場でのからだづくりである。したがって、ここでの取り組みでは、社会参加を考慮しての好ましい作業態度・意欲（持続性・集中力・積極性）と、作業に関わる基本的技能の両面を評価したい。

◎ 木 工

(1) はじめに

木は、本来暖かさ、素朴さなど生きているもののいのちを内蔵している。木工は、自然の素材に手を加えて、日常生活で使用する製品を作っていくところに魅力がある。木工では、製品の作り方の手順を教えることや木工器具の扱い方を教えることも大切であるが、本校高等部では、①、ていねいな製品の製作。②、集中して時間いっぱい取り組む作業態度の育成。③ あいさつ、返事などの社会的対応の育成。の三点を重視して指導している。

(2) 生徒の実態

木工班は、男子8名より成る。この8名を、技能・意欲という観点から、次の三つのグループに分けることができる。①、技能がある程度あり、仕事に見通しを持って取り組める。②、技能的に補助がいり、仕事をするのに指示を必要とする。③、自閉的傾向を持ち、仕事場において集中して取り組むことが難しい。一このように木工班は、幅広い段階の生徒達で構成されている。

※ K・O（1年男）の実態

	項目	具 体 内 容	4 月 の 実 績		項目	具 体 内 容	4 月 の 実 態
活 動 面	仕事の確実さ	鋸で正しく切断する。	経験が乏しく、まっすぐに切断できない。	意 欲 面	自主性	すすんで作業に取り組む。	作業の手順や見通しがもてず、仕事を指示されるまで待っている。
	仕事の速さ				持続性	手を休めず作業を続ける。	5分位作業を続けることができるが、手を休めて友だちに話しかけることが多く見られる。
	道具、材料の使いこなし	やすりの使い方	角度が一定せず、力まかせに削っている。		※木工では、1つの製品をていねいに心をこめて作ることに力を入れたので仕事の速さの観点は評価しない。		
		サンドペーパーの使い方	サンドペーパーを力を入れずに使用する。				

(3) 指導内容及び指導方針

① 年間指導計画

月	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3
題	木工具の使い方		ペーパーナイフの製作					花台の製作			
材	タオルかけ・立て札の製作					自由製作					

② 指導方針

- 働くことの大切さを教え、社会生活に求められる望ましい作業態度を育てる。
- 作業に必要な基本的な知識・技能を身につけさせる。
- あいさつ、返事、言葉遣い等働く者としての好ましい社会的対応を育てる。

③ 実践の概要

題 材	題 材
タオルかけ	本題材は、①角材を切る（タオルの巾）→②ペーパーみがき→③あなをあける→④ニスぬり→⑤ひもを通すの5つの工程から成る。2班に分かれて行った。13個完成した。
農園の立て札	本題材は、①板を切る→②ペーパーみがき→③くぎをうつ→④ペンキをぬるの4つの工程から成る。それぞれの工程の担当者を決め、分業体制で取り組ませた。30個作ることを目標にして35個完成させた。
ペーパーナイフ	本題材は、①デザイン通り型をかく→②糸のこで切る→③目のところに穴をあける→④やすりでけずる→⑤ペーパーでみがく→⑥塗装（靴ずみ）する→布でみがくの7つの工程から成る。この題材は、ひとりになるべく多くの工程を経験させるように考え実施した。現在10本完成した。

④ 「ペーパーナイフ」の製作におけるK・Oの変容例

ア、K・Oの指導課題と手だて、ならびに変容

（下記の表を参照）

	項 目	指 導 課 題	手 だ て	変 容
活 動 面	仕事の確実さ	鋸で線にそって切断する。	正しく鋸が使える生徒とペアで作業をさせる。	線にそって凹凸がなしに切れるようになってきた。
	仕事の速さ			
	道具・材料の使いこなし	板に傷をつけないように気をつけてやすりを扱う。	削り方を何度も手を持って教える 音にも気をつけさせる。	おかしい音がする時は、やすりのあて方が悪いということがわかり、自分でやすりのあて方を修正することができるようになった。
		サンドペーパーで工夫したみがきをする。	サンドペーパーの中に木片を入れて、くるんで使わせる。	直接、力を入れて何度もこすっていると熱くなって危ないことがわかり、小さい木片でまいてから、使うことができるようになった。

意 欲 面	自 主 性	作業の手順を知り工程に従って進んで取り組む。	毎時間仕事の内容、手順を知らせるとともに今日のめあてを決めさせてから取り組ませる。	今日のめあてが、ただ「～をがんばる」 だけだったのが、「～をどんなふうがんばる」かが発表できた。また、自分で見通しをもって、次の仕事に取り組めるようになってきた。
	持 続 性	授業中黙って作業をする。	励ましや賞賛の声かけをし、意欲を持たせる。	話し好きで大儀になると隣の生徒に話しかけていたが、作業力の真剣さが続かないといけなことが、だんだんと分ってきている友だちや先生にほめられたことから、がんばろうという気持ちが見られだした。

イ、考察

K・Oにとって職業科としての「木工」は、初めての経験であり、確実に、ていねいな製品を作ることの厳しさに最初はとまどった様子が見られたが、作業の見通しがもてるようになるにつれ、自分から進んで作業をがんばろうという意欲が見られだした。そして、作業を繰り返す中で技能も向上してきた。

分担した作業に責任をもつこと、友達に教わることも等も見られるなど、好ましい作業態度が形成されつつある。

授業の始めと終りのあいさつも元気よく、はっきりとできるように、きちんと作業服を着ての作業も習慣として行なわれ始めた。

今後も、技能面の向上と共に時間いっぱいていねいな仕事ができるよう指導を続けていきたい。



ペーパーみがきを
しているK・O

(4) 今後の課題

個人事例としてK・Oについての実践を中心に述べてきたが、木工班としての総括的な課題としては、自分が作りだした作品が、職業科としての目標でもある「商品」（製品）として完成したよろこび（満足感）にまで高めていきたい。また、全工程をクリアできない生徒については工程の一部分だけでも技能的に習熟できるところまで指導するようにしたい。

以上のような指導を徹底するためには、指導にあたる私たち自身の専門性を高める必要があること、また、とりくみ自体（教育課程）が系統化され、他の教科や領域で培った力がさらに生かされるよう工夫されることが必要である。なお、木工班を含めた職業科のあり方については、現実の事業所での仕事に対応した「作業内容」に組み変えることも必要である。

◎ 陶 芸

(1) はじめに

「陶芸」は、粘土という直接手に触れることができ、比較的自由に扱うことのできる可塑性の高い素材を使って作業をするところに特徴がある。そのため、生徒達は失敗を恐れず思い切って作業に取り組むことができる。作業では、バザーで販売したり、記念品となる製品を作るということを生徒に知らせ、作業意欲を高めながら量産することを主な課題として取り組ませている。また、作業を通して、確実にでいいない製品を作ろうとする意識・技能を高め、集中して時間一杯取り組む根気強さを養成することをねらいとして指導している。また、あいさつ、返事、言葉づかいなど働く者としての好ましい社会的対応も取り上げ、指導にあたっている。

(2) 生徒の実態

陶芸班は、男子1名、女子4名の計5名より成る。その中には、自閉症1名、崩壊性行動障害1名、てんかん1名、ダウン症1名が含まれ、障害も多種多様である。生徒の実態をみると、知的には高いが情緒的に不安定で落ち着いて作業に取り組めない者、精神発達の遅れのため、不器用で巧み性に欠け、作業がうまくできない者の2グループに分かれるが、いずれにしても、作業技能、作業意欲ともに、高等部の中では課題をかかえたグループであるといえる。

※(例) K・T(1年女)の実態

	項 目	具 体 内 容	4 月 の 実 態		項 目	具 体 内 容	4 月 の 実 態
活 動 面	仕事の確 実さ	規格に合う 製品を作る。	巧み性に乏しく、形・大き さとも規格に合わない。	意 欲 面	自主性	すすんで作 業に取り組 む。	自分で陶芸室に来ることが できず、教室で迎えが来る のを待っている。作業に取り かかるまでに20分近くか かり、作業時間が短い。
	仕事の速 さ	時間内に製 品が何個作 れるか。	10個のめあてまでは速いが それ以上作ろうとせず、手 を止めてしまう。				
	道具・材 料の使い こなし	粘土のこね 方 へらの使い 方	からだ全体を使って粘土を こねることができなかった。 力の調節ができず、粘土を 切ってしまう。		持続性	手を休めず 作業を続け る。	毎時間1回は、落ちこんで 座りこみ、一度座りこむと 授業が終わるまでそのまま でいる。

(3) 指導内容及び指導方針

① 年間指導計画

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
題 材	自由な造 形	「手づくりはぜのは しおき」の製作				本焼きの準 備と製品の 整理※		「型抜きに よるはしお き」の製作		※9・10 月と同様		自由な 造形

② 指導方針

- 働くことの大切さを教え、積極的に作業に取り組もうとする意欲を育てる。一定時間を持続させ、集中させる。
- 作業に必要な基本的な知識・技能を身につける。目、耳などの感覚諸器官と手、指先、腕、その他からだのいろいろな器官を目的に応じて、正確に、すばやく協応させる力。粘土の性

質、道具や機械の用途、機能に応じ、力を入れぐあいをうまくコントロールする力をつけさせる。

- 遅刻をしない、あいさつ、返事、言葉づかいなどをきちんとさせる。また、身だしなみにも気をつける。

③ 実践の概要

指 導 内 容	概 要
粘土を切る。	使用されると思われる粘土の量を自分で判断して針金で切りとる。その後、はかりで量る。
粘土をこねる。	いすから立ち、腕の動きだけでなく、重心の移動により粘土をこねる。
成型の手順を知る。	教師と一緒に何個か作ったり、図を参考にしたりして手順を覚えていく。
成型	規格に合った製品を時間一杯量産する。(はしおき・灰皿・花瓶など)
製品の判別	素焼き、本焼き後の製品の良否を判別する。
ペーパーがけ	底を平らにするため、サンドペーパーで底をこする。
釉薬がけの手伝い	釉薬がけした製品の底についた薬を、スポンジでふきとる。
窯入れ出しの手伝い	製品が並んだ台を落とさないように気をつけながら、窯から出し入れをする。
台紙にはる。	台紙に両面テープを5枚はりつけ、製品をとりつける。
箱づめ・包装	製品がとれないか確認したうえで箱づめし、ていねいに包装する。

(4) 「手づくりはぜのはしおき」の製作におけるK・Tの変容例

- ① K・Tの指導課題と手だて 一下記の表を参照

- ② K・Tの変容 一下記の表を参照

項 目	指 導 課 題	手 だ て	変 容																												
仕事の確実さ	目とえらのとれな いはしおきを作る。	○手順の指導の際 どべを使った場 合とそうでない 場合の製品を比 較させる。 ○成型後の点検を 習慣づける。	毎時間1個めは一緒に作り、どべを使うよう声かけをし ているうちに、どべの使用が定着してきた。しかし、指で しっかり押さえないのでとれやすい。目とえらの点検は、 最初は教師が行っていたが、7月ごろになると、1個作る ごとに目とえらを持ち上げ点検する姿が見られるようにな った。とれた目やえらをつけ直すこともできるようになっ てきている。																												
仕事の速さ	1時間の授業で10 個以上はしおきを 作る。	○10個ごとに1枚 シールをはる表 を作り、競争意 識を高める。	粘土に慣れるにつれて、規格に合った製品の数が増えて きており、手の動きも速くなってきている。授業の終わり にシールをはるのが楽しみのようだ。他の生徒に追いつき たいという意欲が作業の能率を上げてきている。																												
			<table><tr><td>月日</td><td>5/12</td><td>5/30</td><td>6/4</td><td>6/9</td><td>6/16</td><td>6/20</td><td>6/27</td><td>6/29</td><td>6/30</td><td>7/4</td><td>7/6</td><td>7/7</td><td>7/12</td></tr><tr><td>個数</td><td>13</td><td>10</td><td>3</td><td>8</td><td>11</td><td>13</td><td>12</td><td>17</td><td>19</td><td>14</td><td>20</td><td>18</td><td>18</td></tr></table>	月日	5/12	5/30	6/4	6/9	6/16	6/20	6/27	6/29	6/30	7/4	7/6	7/7	7/12	個数	13	10	3	8	11	13	12	17	19	14	20	18	18
			月日	5/12	5/30	6/4	6/9	6/16	6/20	6/27	6/29	6/30	7/4	7/6	7/7	7/12															
個数	13	10	3	8	11	13	12	17	19	14	20	18	18																		
道具・材料の 使いこなし	○重心の移動を利用 して粘土をこ ねる。 ○模様を入れる時 にへらで粘土を 切らない。	○足を前後に開か せ「前、後ろ」 と重心の移動を しやすい声をか け補助をする。 ○模様を入れる時	○教師の模範を見せたり、重心の移動・手の動きを補助付 きで何回か体験するうちに、からだの動かし方の要領を つかんだようだ。まだからだ全体を使って粘土をこねる ことはできていないが、重心の移動により以前より随分 うまく粘土がこねれるようになってきている。 ○最初は声かけをしても、尾やえらの模様をつける時に粘																												

		チョン、チョン」 と声をかけ補助 をする。	土が切れてしまうことが多かったが、手をとってこのくらい押さえるのだと数回行って見たところ、力の入れぐあいがわかってきたようで、切れることが少なくなってきた。
自 主 性	<ul style="list-style-type: none"> ○遅刻しないで陶芸室に来る。 ○陶芸室に来たら10分以内に作業にとりかかる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○長休憩の時に、次は陶芸だと声をかけておき、遅れてきても報告すれば叱らない。 	○6月ごろまでは毎時間遅刻をしたが、だんだんと自主的に報告をし、作業にとりかかるようになった。自主的に報告をすれば、作業にかかれるが、それまでに20分以上かかることが多かった。懇話会や研究授業など参加者のあった7月は、ほとんど遅刻がなく、それを機会に定刻に陶芸室に行こうという意識が芽生えてきたようだ。
持 続 性	<ul style="list-style-type: none"> ○失敗しても座りこまない。 ○授業の終わりまで、作業の手をとめない。 	<ul style="list-style-type: none"> ○座りこんだ時にはむやみに声かけをせず、待つ。 ○励ましや賞賛の声かけをし、意欲を持たせる。 	4月当初は、自分のやりたいことができないと座りこんだが、誰もかまわず作業を続けた。失敗しても何回でも使える素材だと理解するにつれ、落ちこみも消え、7月になると、座りこみは全くみられなくなった。その日の気分によって集中力が違うが、手を休めても声かけによって再び作業を始め、終わりまでがんばるようになってきている。

③ 考察及び今後の課題

K・Tにとって職業科としての「陶芸」は、初めての経験であり、自信の無さからの落ちこみが激しかったが、粘土の扱いに慣れてくるにつれ、楽しさが味わえるようになってきている。また、製品を作るという意識も高まり、「自分の製品は果たして売れるだろうか」という心配もするようになった。手づくりはぜのはしおき製作は、少々の形のくずれや、個々の生徒の特徴的なデザインが個性として認められるものであったので、本児も意欲的に取り組むことができ、その結果、技能も向上してきた。今後は「型抜きによるはしおき」の製作に取り組ませ、規格品を作る厳しさも体験させたいと考えている。一定の時間内に、規格に合った製品を何個作りあげるのか、ただ漫然と取り組ませるのではなく、自分のめあてを持って取り組むことができるようにさせたいと考える。



(5) 今後の課題



9月までの実践で、生徒は各々めあてを持って学習に取り組めるようになってきている。粘土の扱いには慣れたものの、技能をみるとまだまだ未熟である。又、気分がムラがあり、常にめあてが達成できるわけでもなく、時間一杯作業を続ける持久力も十分に養われていない。今後は現在まで培ってきた作業意欲を基に、難度の高い題材にも挑戦してみたいと考える。陶芸についても個々の生徒の実態に応じた手だてを考え、繰り返し指導を続けていけば、必ず習得させることができるものと考えている。

2 作 業 学 習（農耕園芸）

(1) 作業学習（農耕園芸）の位置づけ

職業コースとしての農耕園芸ではなく作業学習に位置づけたのは、作業技能の育成よりも習慣としての作業態度の養成をねらうのに、農園作業が適していることがある。作業学習は教科・領域を統合した指導の一形態であり、一教科である「職業」で指導させる内容を含めて、より広い内容が指導されることを必要とする。

このような点でみると農耕園芸は、① 作物を育てるためには毎日の世話が必要となる（日常生活の中にパターン化できる）② 手指機能を生かした作業技能の向上という面もあるが、粗大運動の面に重点をおくことで働くことの基礎づくりとなる。③ いのちあるものを育てることや自然を素材とするため、情緒的安定をはかることができる。

また、集団労働として組織することにより、力を合わせて働くことの大切さを認識し、社会生活に参加していく能力を培うこともできると考える。

(2) 生徒の実態

本校高等部の作業学習における生徒の実態を総括的に述べると、比較的すすんで意欲をもって取り組む生徒と、認知力が育っていないために作業そのものがむずかしい生徒との格差が大きい。しかし、生産活動として自然と取り組むということから作業過程の中にどれかの仕事ができるという特徴もあり、作業態度が着実に育ってきている。

また、からだづくりとの関連でみると、意欲の育ちにささえられている点はあるが、からだの健康という面で貢献していると考えられる実態がある。体力的には長時間の作業をやりぬくことのむずかしい生徒もあるが、他の教科・領域とも結合して働く力が育ってきている。

そこで、次の二児の実態を中心に、全体の指導計画や方針・実践とも関連させて述べてみたい。（作業学習では、技能面より意欲面を重点課題としたので、その点での実態を取りあげた。）

◆ K・T（高1女）の実態

	具 体 的 目 標	実 態 （4 月）
自 主 性	◎ 指示されなくても作業（うねづくり・水やり・除草）に取り組む	◎ 作業の開始に遅れたり、みんなが作業をしても、畑のはしで坐り込んで動かないことが多く、作業が終っても、次の行動に移れないことが多かった。
持 続 性	◎ 時間いっぱい諸作業に手抜きなく一生懸命働く。	◎ 作業をはじめた時には、特に除草などには時間いっぱいできるが、体力的に劣ることもあって、くわなどで畑が耕やすいような仕事は途中で投げだすことがあった。
情 緒	◎ どんなきびしい作業にも、安定して楽しく取り組む。	◎ 誉めたり、すかしたり声かけをしてやると意欲がでてきて、楽しくおもしろそうに取り組めるが、目を離すとその場に不機嫌そうにたたずむことがあった。

◆ M・N（高1男）の実態

	具 体 的 目 標	実 態 （4 月）
自 主 性	◎ 指示されなくても作業（うねづくり・水やり・除草）に取り組む。	◎ 自信のなさや経験の不足からか、学校を休むことがあり作業に対しても指示されなければ、やりはじめないところが見られる。
持 続 性	◎ 時間いっぱい諸作業に手抜きなく一生懸命働く。	◎ 本来的には力量がありながら、わざとなまけたり、手抜きするずるさがあり、友だちと作業中に談笑することが多く、集中力に欠ける。
情 緒	◎ どんなきびしい作業にも、安定して楽しく取り組む。	◎ 気に入らないとふてくされた態度をとり、きびしい作業をさける傾向がみられた。疎外感が人一倍強い感じで、友だちを見下すところがある。

(3) 指導内容及び指導方針

① 年間指導計画と実践内容

園芸では、花の移植を中心に取り組み、農耕についても、えんどう豆・そら豆・なす等の収穫までのとりくみはあったが、通年的なものとして、植付けから収穫、加工までを系統的に取り組んだ「さつまいもの栽培」についての年間指導計画をのべることにする。

月	単 元 名 と 指 導 内 容	指 導 上 の 留 意 点
4	<div style="display: flex; flex-direction: column; align-items: flex-start;"> <div style="margin-bottom: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">計画</div> <div style="margin-left: 10px;">(前年度の反省に基いて収穫までの計画をたてる)</div> </div> <div style="margin-bottom: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">畑づくり</div> <div style="margin-left: 10px;">(耕起・施肥・うねづくり)</div> </div> <div style="margin-bottom: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">苗植え</div> <div style="margin-left: 10px;">(植え方の種類)</div> </div> <div style="margin-bottom: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">手 入 れ</div> <div style="margin-left: 10px;">(除草・土寄せ・水やり)</div> </div> <div style="margin-bottom: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">収穫</div> <div style="margin-left: 10px;">(いもほり)</div> </div> <div style="margin-bottom: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">収穫物の活用</div> <div style="margin-left: 10px;">(づくり・干いも)</div> </div> <div style="margin-bottom: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">畑の整理</div> <div style="margin-left: 10px;">(除草・石ひろい)</div> </div> </div>	◎ マルチかけ・うねづくりは、全員が、なんらかの作業に、意欲をもって、取りくめるよう配慮する。
5		◎ 植えつけでは、しっかりと土をかぶせて定着させる。除草は、毎日持続させる。
6		
7		◎ 除草・石ひろいを個人やクラスの分担地域を決めて行わせる。
8		
9		
10		
11		
12		
1		
2		
3		

② 指導方針

朝の活動の中の取り組み（約20分間）であり、個別目標とは別に、協力・共同するという集団（2グループを等質に編成）の力を重視した。

また、農園作業の特性から、自主性・持続性・情緒の安定という意欲面を重視して取り組む。なお、集中的な実践の期間をとるため、6月には校内職業実習（ $6/5 \sim 6/8$ ）として、うねづくり・除草・水やりを中心に実践してきた。

(4) K・TとM・Nの変容について

このような取り組みの中で、4月の実態でのべた二児の変容のようすは、次のようであった。



◆ K・Tの変容

自主性	<ul style="list-style-type: none"> 作業への不参加が全くなかった。自らの意志で仕事についてわからないところをたずねたり、仕事に前向きに取り組みはじめている。
持続性	<ul style="list-style-type: none"> 力を必要とする作業（うねづくり・運搬等）にも自分の力いっぱいのところまで頑張ることができるようになってきた。
情緒	<ul style="list-style-type: none"> かたくなに作業を拒むことも少なくなり、友だちと一緒に（時には援助の手をさしのべて）楽しく作業をしている姿が見られるようになった。

◆ M・Nの変容

自主性	<ul style="list-style-type: none"> 今日は「かまを使って除草をさせて下さい」等と申し出たり、指示にもてきばきと応えて、すすんで作業にとりくむようになった。
持続性	<ul style="list-style-type: none"> 作業がはじまると、道具を器用に使いこなす、汗がしたたり落ちるのも、ものとはせず、時間いっぱい黙々と働くようになった。
情緒	<ul style="list-style-type: none"> 作業中は一生懸命取り組み、友だちと協調して分担をやりとげるところまで成長してきた。この中で、安定した生活ができ明るさが出てきた。

(5) 考察と今後の課題

作業学習の目標とした、意欲を育てるという点で、苦しい仕事ではあったが自主的に集中力をもってかかわっている生徒が多くなってきた。また、畑のうねを個人や学級の分担を木札をつけてはっきりさせたことで、休憩時間を使っの除草・水やりに取り組む生徒が増え、生きものを大切にする姿勢が生れつつある。

しかし、教育課程の中で、校内職業学習・現場実習等をかなり重視して長期間にわたって位置づけたため、帯時間として設定した農耕園芸の時間を圧迫した点は改善の余地を残した。また、広大な耕地に加えて温室の管理等、系統的・持続的に作業時間を確保しなければならない農耕園芸にあっては、他の教科・領域との調整が重要な検討課題となっている。

3 現 場 実 習

(1) 基本的な考え方

現場実習の目的は、“一定期間校外の作業所、事業所に於て、作業学習の機会を与えることによって、勤労の意欲や喜びを体得させるとともに、生産活動を通して、協調性や社会性を育成し、社会への自立に必要な資質を育成する。” ことにある。いいかえれば、実習先の作業所、事業所を“すすんで生き生きとからだを動かす場”と考え、それぞれの場でからだを動かし働くことを通して、次のようなねらいの達成を図るものである。

- 職場における基本的ルールを身につけさせる。
- 適切な作業態度を身につけさせる。
- 基本的な作業遂行力を身につけさせる。
- 職場で適切な対人関係がもてる力を身につけさせる。

以上のねらいを達成させることは、将来職業生活を送る上での必要条件になると考えられる。養護学校を卒業して40年以上、企業であれ授産所であれ作業所であれ、様々な形で働いていく彼らが、次に掲げる“働くうえに必要な能力”を身につけることによって、上記のねらいを達成する基盤がつくられると考える。

① 働く意識

“働く”ということの理屈はわからなくても、自分は働きたいのだという働くことに向っていく意識をもっていること、そういった意識をもつことが一番大切なことである。例えば、現場実習を楽しみに待つ、実習中は遅刻をしない、生き生きとした表情で働く等の態度から、働きたいという彼らの気持ちが読みとれる。

② 意 欲

意欲は働くことを進めていく基本をつくっており、意欲をもって働く生徒は確かに伸びが見られる。

例えば、1年女子K・T（ダウン症）の場合は、体力がないことを理由に長距離走、農園作業等を見学することが多かったが、具体的な現場実習先（喫茶店）が決定すると、これらの学習に積極的に参加するようになり、実習そのものも、家族、担任ともに驚くほどのがんばりを見せてくれた。



③ 体 力

特に知恵遅れの障害児において、健康な身体は働くうえでの資本であり、生き生きとからだを動かすために欠かすことのできない重要な条件である。毎回、現場実習先から言われる「身体は大きくても力の使い方を知らん」「いかさま体力がないなあ」「勉強はあんまりできんだけえ、せめて体力だけはつけといてやらねば」等からも体力の重要性は明らかである。しかし、ただ単に強いからだを作るだけではなく、からだの使い方、力の使い方が身につかなければ体

力が育成できたことにはならない。

④ 持 続 力

毎日の就業時間中の持続力だけではなく、暑い日も寒い日もコンスタントに働き続ける持続する力を有しないと労働者としての生活は成立しない。同時に、毎日の生活のリズムを働くりズムにかえていく必要性がでてくる。持続力を身につけることが、働くりズムをつくっていく過程の中でもっとも重要であるともいえる。

(2) 実 習 先

現場実習先は、作業所、授産所、企業に協力を依頼している。平成元年度の現場実習では作業所3、電機3、喫茶店2、美容院3、旅館1、縫製2、製菓1、木工1、清掃業1、機械1、自動車整備1、自動車钣金1、の各協力先において26名が2週間実習を行った。

(3) 評 価

次のような具体項目による評価を○△×で行い、実習後の課題をさぐる手がかりとしている。

- | | |
|---------------------|-----------------------|
| 1. 遅刻をしない。 | 9. 禁じられた行為をしない。 |
| 2. 「おはようございます」が言える。 | 10. 根気よく仕事をする事ができる。 |
| 3. わからない時にはたずねる。 | 11. 正確、ていねいに仕事を行う。 |
| 4. 失敗した時には、素直にあやまる。 | 12. 仕事の終了を報告し次の指示を仰ぐ。 |
| 5. 敬語をつかって、話しが出来る。 | 13. 職場の人たちの話しの仲間になれる。 |
| 6. 仕事中はよそ見をしない。 | 14. 作業後の後始末や掃除が出来る。 |
| 7. 「はい」と元気よく返事ができる。 | 15. 帰りのあいさつができる。 |
| 8. 工作中に、作業場を離れない。 | |

現場実習協力事業所は、実習協力のみの事業所と採用も考慮してもらえる事業所に分類される実習の場を提供してくださる事業所の評価は比較的甘く、採用条件の事業所は非常に厳しい評価が成される傾向があるのは当然のことである。

特に採用を考える時に重視されることがらを、上記の評価項目、総合評価の内容からまとめると次のようになる。

- | | |
|---------------|------------|
| 1. 作業意欲 | 5. 協調性 |
| 2. 働くことに理解、認識 | 6. あいさつ、返事 |
| 3. 作業の持続性 | 7. 注意力 |
| 4. 危険に対する配慮 | 8. 規律の遵守 |

の順になっており、特に総合所見の欄に“仕事はまだまだであるが、やる気が見られるので将来性があると考え”といった書き方をされた生徒は、現時点の能力は低くても、採用される確率が非常に高くなっている。意欲、即ちやる気があれば、“すすんで行動する”ことになる。高等部の研究テーマである“すすんで生き生きとからだを動かす子”になれば、就労の可能性が大になるといえる。

(4) 現場実習における T・K の労働意欲の変容事例

① 実 態

T・K（高等部3年生男子）自閉的傾向

性格・行動上の特性……積極的に人と関わっていこうとするが、自己中心的な面やこだわりが強く、人から敬遠されがちである。

② 実習評価および手だて

学年	時	実 習 先	実 習 評 価（事業所）	手 だ て
1 年	夏	岡野電機	<ul style="list-style-type: none"> 作業そのものは出来るが、集中力持続力に欠ける為作業量が少ない→ やる気がなくよく休む → 	<ul style="list-style-type: none"> 母親も同じ会社で仕事をする事によって、一諸に通勤して T・K の実態を知ってもらう 家庭でも K・T に役割を持たせる
	秋	野村木工	<ul style="list-style-type: none"> 声が小さい → 働くことの意識が低い → 	<ul style="list-style-type: none"> 発言の内容に自信を持たせる 同級生の頑張っている様子を知らせる
2 年	夏	湖山精工	<ul style="list-style-type: none"> みんなで一つのもの（ワークランブ）を組み立てる意識がなく、自分の工程だけにこだわり、指示をきこうとしない 	<ul style="list-style-type: none"> 社長に強く注意を受ける ↓ 怒られても休まず通う
	秋	ファミリー印刷	<ul style="list-style-type: none"> 人が見ていないとすぐサボる → 注意を真面目に聞かない 	<ul style="list-style-type: none"> 活字の拾い・返しが一番大切な仕事であることを強調し、仕事にプライドを持たせる ↓ 注意後半日は真面目にする
3 年	春	不参加	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> ※春休みに同級生は各事業所で実習を行ったが、T・K は家で自由に過ごす 母親にも卒業後の進路先について緊迫感がない </div>	
	夏	ヨシミツ産業	<ul style="list-style-type: none"> 何回もトイレに行く等、やる気が見られない 同級生の N・Y（女）に作業量で負けるといじける 	専務に「もう来なくてもいい、働く気がなかったら帰れ」とどなられる ↓ それ以後黙々と働くが、作業量は少ない
	秋	セブン電子	<ul style="list-style-type: none"> ※母親に焦りが見られるようになり 同級生の K・T（男）の面倒を見ながらよく頑張った 単純作業であったが、真面目にできたし、やる気も見られた 	1 時間程度毎日一緒に作業をする <ul style="list-style-type: none"> K・T は T・K より作業能力が低い為、面倒を見ることによって自分自身もやる気が育った 単純作業ではあるが、目先を変える等事業主が配慮された

3 年生の秋の実習でようやく本人のやる気が事業主に認められ、職場適応訓練制度が雇用の条件ではあるが、卒業後の採用がほぼ決定した。

(5) 今後の課題

障害も家庭環境も多種多様になった高等部の生徒たち個々に適した現場実習先を開拓すること自体が、非常に困難になってきてはいるが、生き生きと働ける場がなければ生徒の力も発揮出来ないのだから、先ず、一人ひとりが生かされる場を一つでも多く獲得するように努力していきたいと考える。

(ウ) 知的学習を通して

1 保健体育科

(1) 実 態

「自分のからだについて」調査より抜粋 対象者：高等部3年生（10名）

調 査 項 目	人 数
○身長を知っているか。	
・正しい測定値を知っている。	0
・だいたい知っている。	2
・知らない。	8
○体重を知っているか。	
・正しい測定値を知っている。	0
・だいたい知っている。	3
・知らない。	7
○自分で体重をはかれるか。	
・正しくはかれる。	2
・表示の数字は読める。	2
・はかれない。	6
○自分で体温をはかれるか。	
・はかれる。	1
・はかれない。	9
○くつのサイズを知っているか。	
・知っている。	3
・くつを見ればわかる。	2
・わからない。	5
○自分の生年月日が言えるか。	
・言える。	6
・言えない。	4
○自分の血液型を知っているか。	
・知っている。	5
・知らない。	4
・検査をしていない。	1
○からだの部位を指した時に	
・「額・おでこ」と言える。	4
・「あご」と言える。	3
・「ひざ」と言える。	3
・「ふくらはぎ」と言える。	0

調査は実際に体重計や体温計などを使用して実施したが、本クラスには次のような傾向があると考えられる。

- ・自分の身長・体重など体格・体位に関する知識のない生徒が多く、測定も自分でしたことがなく、できない生徒が大半を占める。
- ・体重測定は毎日クラスで行っているにもかかわらず、はかれない生徒が多い。一部の生徒や教師がはかるため、能力はあっても経験不足ではかれない生徒もいるのではないかと考えられる。
- ・自分が身につける衣服・くつなどのサイズの認識がない生徒が多い。
- ・からだの部位の名称を知らない。特に「ふくらはぎ」はあまり使わない言葉のためか、初めて聞いたという生徒もいた。また、「かかと」と「つまさき」を逆に覚えている生徒も数名いる。
- ・血液型はよく知っているのに、生年月日が言えない生徒がいる。
- ・健康管理は保護者まかせな生徒が多く、体重や体温などが健康のバロメーターになることを知っている生徒が少ない。

(2) 基本的な考え方

高等部では保健体育科の「保健」の分野をクラス単位で学習している。生徒の実態や卒業後の生活を考慮して、主な学習内容として「自分のからだについての知識」を取り上げた。本クラスには卒業後、住み込みなど一人で

生活することが予想される生徒もあり、特に必要だと考えている。指導にあたっては単なる知識の注入ではなく、即実践につながるような手だてや配慮を考えたい。将来にわたって自分の心身の健康を管理し、増進していくための知識や実践の具体的方法を身につけさせることをねらっている。授業以外の日常生活のあらゆる場面において、このような視点を持って指導にあたり、学習の成果を生かしていくものとする。

(3) 内 容

〔からだの部位・名称 自分のからだの体格・体位
 体重計・体温計のはかり方 脈のとり方 健康管理についての知識〕

(4) 実 践 例

- ① 単元名 自分のからだを知ろう
- ② 対象生徒 高等部3年 10名
- ③ 指導計画と学習活動

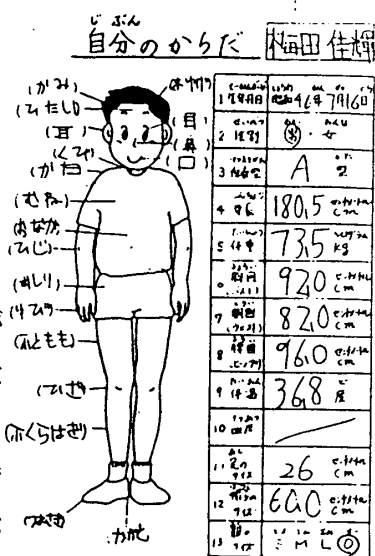
	指 導 計 画	指 導 の ね ら い	学 習 活 動
第 一 次	からだの仕組みを知ろう。(2時間)	<ul style="list-style-type: none"> ○からだの部位の名称を知り、覚える。 ○食べ物の通る道すじを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○指された部位の名称を声を出して言い、からだのカードに記入した。一人ずつ能力に合わせ、口答試問も行った。 ○食物の通る道すじのかかれた図を見て、食物が排せつ物になる過程や、器管の名称を知った。
第 二 次	自分の身長や体重を知ろう。(2時間)	<ul style="list-style-type: none"> ○自分のからだについての知識を得る。(体格・体位・生年月日・血液型・くつ等のサイズ) 	<ul style="list-style-type: none"> ○からだのカードにある項目を一つずつ確認して記入した。体格・体位は教師がその場ではかってみた。自分ではかかれる生徒は自分ではかり、正しい測定値を知った。 ○生年月日・血液型・くつなどのサイズは、日常生活の中で抜くうちに口答試問した。
第 三 次	身長や体重、体温をはかってみよう。(2時間)	<ul style="list-style-type: none"> ○体重計・体温計のはかり方を知り、自分ではかってみる。 ○できる生徒は、脈のとり方を知り、自分でとってみる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○体重計の目盛りの読み方を図により知り、実際に1人ずつ自分ではかってみた。目盛りがよめない生徒には、表示された数字を読み、だいたいの数値がつかめるよう補助についた。体温計は、電子体温計を使用し、まず、正しいはかり方を確認した。(スイッチを押す→わきにはさむ→ピーッの音ではずし、数字を読む)その後、各自ではかった。 ○脈のとり方を知り、自分の脈、友達の脈をさがし、脈のとり方を覚えた。それから1分間音楽にあわせてジャンプした後の脈、1分後の脈をとってみた。

④ 生徒の変容

- 毎日の体重測定で5名の生徒が自分ではかれるようになった。
- からだの部位を「ここ」ではなく名称で言えるようになってきた。
- 体温計に興味を持ち、休憩時にはかってみる生徒がでてきた。
- 運動後、自分で脈をとる姿が数名みられるようになってきた。

(5) 考察と今後の課題

「自分のからだを知ろう」を学習し、自分のからだについての知識が増え、興味を持ち始めてきている。しかし、自己健康管理についての意識が低く、知識もあまりない。今後は自己の健康の保持・増進をねらってさらに学習を発展させたいと考えている。自分でできることを1つでも増やし、自分のからは自分で守るという意識を高めたいが、能力が比較的低い生徒には家庭との連携をはかる必要性を感じている。



からだのカード

2 家庭科（食物関係の指導より）

(1) 実 態

○アンケート集計より（実施 昭和63年度）

対象者 本校高等部（27名）、他県国立大学附属養護学校高等部（151名）

ア ン ケ ー ト 項 目	本校 (%)	他県 (%)
○体は丈夫か		
・とても丈夫	7.4	9.9
・丈夫な方	29.6	37.1
・ふつう	37.1	38.4
・病弱な方	22.2	12.5
・とても病弱	0.0	0.7
○朝食は食べているか		
・毎朝食べている	70.0	84.7
・食べることの方が多い	18.5	9.3
・食べないことの方が多い	3.7	6.0
・全く食べない	0.0	0.0
○おやつを学校から帰宅後		
・毎日必ず食べる	29.6	36.4
・食べることが多い	29.6	24.5
・たまに食べる	37.1	33.1
・全く食べない	0.0	4.0
○三度の食事の量は		
・満腹まで	37.0	23.8
・八分目	40.7	48.3
・考えていない	14.8	21.2
○食べ物の好ききらいは		
・かなりある	11.1	7.9
・少しある	29.6	31.1
・ほとんどない	44.5	48.4
・全くない	14.8	11.9

集計結果より、本校の高等部の生徒には次のような傾向があると考えられる。

- ・体を病弱としてとらえている生徒が比較的多い。
- ・毎朝、朝食を食べている生徒が他県の養護学校と比較して少ない。
- ・生徒の半数近くに好ききらいがある。
- ・食事の量を制限できない生徒ができる生徒を上回っている。

(2) 基本的な考え方

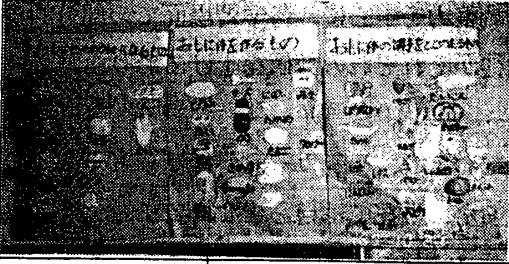

アンケート結果より得られた傾向と本年度の生徒の実態を踏まえ、家庭科では「知的からだづくり」と称し、食生活を主体的に管理し健康の保持、増進が少しでもできるようになることをねらって取り組んだ。指導にあたっては、生徒の実態から特に必要と考えられる内容を取り上げ、それを重点的に指導していくこととした。

(3) 内 容

〔 食生活の現状 間食のとり方 栄養素の種類とその主なはたらき 〕
〔 3つの基礎食品群 献立てづくり 簡単な調理等 〕

(4) 実 践 例

- ① 単元名 私たちの食べ物
- ② 対象生徒 高等部2年生 7名
- ③ 指導内容・指導上のねらい及び学習活動

	指導内容	指導上のねらい	学 習 活 動
第一 次	<ul style="list-style-type: none"> 食品について 食品のはたらき 食品の分類 	<ul style="list-style-type: none"> 食品には主に3つのはたらきのあることを知る。 食品をはたらきにより、3つに分類する。 食品の分類表を作成する。 	<ol style="list-style-type: none"> 食品3種類（パン、バナナ、ウィンナー）を試食し、それらと関連づけて食品の3つの主なはたらきを知った。 食品には、主に3つのはたらき（主に熱や力のもとになる、主に体を作る、主に体の調子をととのえる）があり、それらに属する食品にはどのようなものがあるのかについて、本等を利用して調べた。 調べたものを皆で1つの表にまとめた。模造紙3枚程度の大きさの表の中に、絵と文字とで食品を表わし、誰もが食品をイメージできやすいようにした。 今後の食生活に活用できるよう、3で作成した表を個人持ちの手札用に作りかえた。 
第二 次	<ul style="list-style-type: none"> バランスのとれた食事づくり 献立での条件 献立でづくり 弁当づくり 	<ul style="list-style-type: none"> 栄養的にバランスのとれた献立を考える。 自分が食べる弁当をつくる。 	<ol style="list-style-type: none"> 3つの基礎食品群から偏りなく食品がとれるよう、また、あまり時間をかけず手軽にできるようなことを踏まえて弁当のおかずを考えた。 各自が、おかずを一品ずつ作り、それらを持ち寄って弁当箱に詰め、試食した。
第三 次	<ul style="list-style-type: none"> 健康な食生活を送るために 	<ul style="list-style-type: none"> バランスのとれた食事を心がけようとする。 	<ol style="list-style-type: none"> 好ききらいなく食べると病気にもかかりにくいなど、健康の保持につながることを再確認した。

④ 生徒の変容

本単元の学習を行った後、生徒の中に次のような様子が見受けられるようになってきた。

- ・日頃、よく口にしている食品を取り上げ、それがどういう働きをするのかについて、尋ねるようになってきた。
- ・家で買い物をした時に買った食品を生活ノートに1つひとつ記載するようになってきた。
- ・給食で口にしている食品が3つの働きのうち、どこに属するかが分かり分類できるようになってきた。

(5) 考察と今後の課題

家庭科学学習のみならず日常生活指導において食生活について取り上げて指導してきた。その成果として、生徒達は物への関心、食物のとり方への関心を持ち始めてきている。例えば、太り出してきたから食事を少し控えようといった具合に、自分の体を自己評価して食事のとり方をコントロールする生徒が見受けられるようになってきた。しかし、好ききらいが一向に直らない生徒や食欲を自分でコントロールできない生徒などもあり、全ての生徒に指導の効果があったとはいえない点もある。また、家庭との連携についても家庭によって食生活に対する考え方が一様でないため、働きかけが難しいといった点がある。このため、全ての生徒が好ましい食生活を送れるようになるまでに時間がかかると考えるが、引き続き指導を行っていきたい。